福岡市埋蔵文化財調査報告書 第323集

那珂 7

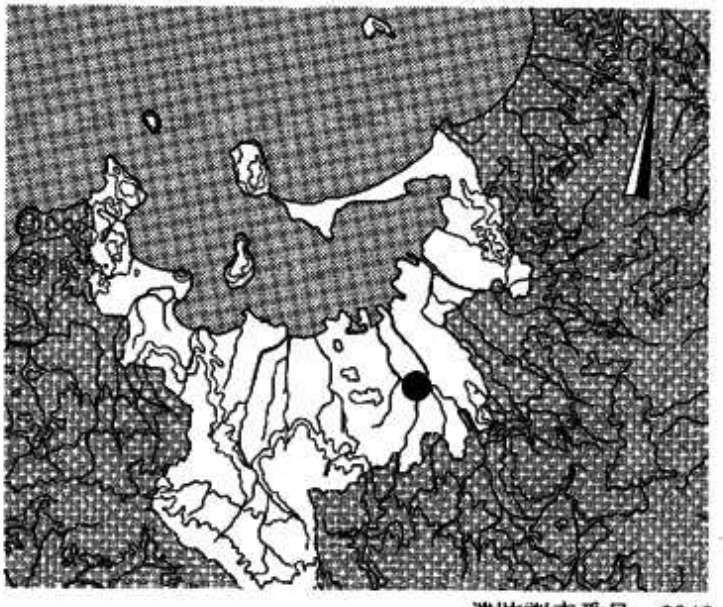
——那珂遺跡第19次調査報告——

1993
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第323集

那珂（なか） 7

——那珂遺跡群第19次調査報告——



遺跡調査番号　8848

遺 跡 番 号　NAK-19

1 9 9 3

福岡市教育委員会

序

那珂遺跡は，福岡平野の中央に位置する遺跡であり，これまでに行われた調査から，その重要性が十分認識されている遺跡でもあります。　昭和63年度，都市計画道路竹下駅前線の新設工事に先立ち，その一部を記録保存のために発掘調査しました。本来，埋蔵文化財は，後世にそのままのかたちで伝えるべき，国民共有の財産であります。今回の調査は，この意味において次善の策というべきものではありましたが，ここにおいて得られました調査成果が，埋蔵文化財に対する理解と活用のための一助となれば幸いです。

最後に，調査に際し，ご協力頂いた地元および工事関係の多くの方々に心からお礼申し上げます。

平成５年１月

福岡市教育委員会
教育長　井　口　雄　哉

はじめに

1．本書は，昭和63（1988）年度に，福岡市教育委員会がおこなった，那珂（なか）遺跡第19次発掘調査の成果報告書である。発掘調査は，土木局街路課の依頼によって，都市計画道路竹下駅前線新設に先立ち，その計画地内について実施した。調査の要目を下表に示す。

2．発掘調査にあたっては，条件整備から現場作業の終了に至るまで，工事担当者および，道路隣接地の方々に種々ご配慮頂いた。また，作業員の方々には天候不順の折りの調査にも関わらず，調査にご協力頂いた。以上記して感謝申し上げます。

3．現場作業・整理報告作業は，教育委員会文化部埋蔵文化財課埋蔵文化財第一係　杉山富雄が担当した。

4．那珂19次調査に係る資料については，すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し，管理する。

遺跡調査番号	8848		調査略号	NAK．19	
調査地	博多区竹下5丁目5番地内				
用途面積	1,600㎡	調査対象面積	1,600㎡	調査面積	880㎡
調査期間	1988年1月26日～3月24日		事前審査番号		

凡　　例

1．報告中，遺物を示す番号は原則として，埋蔵文化財センター収蔵台帳上の登録遺物番号である。

2．平面上の位置は，工事用地に設定された座標上の位置関係により，示す。

3．他調査地点の遺構との位置関係，あるいは，方位などを考察する上で，標準化された座標での表示が必要と考えているが，今回調査において実現する事はできなかった。

本文目次

Ⅰ　那珂遺跡とその調査……1

Ⅱ　那珂19次調査の概要……2

　1　調査に至る経緯……2

　2　調査の経過……2

　3　調査成果の概要……3

Ⅲ　那珂19次調査の成果……7

　溝　2……7

　溝　4……10

　溝　6……19

　溝　10……20

　土壙　43……22

　井戸　44……27

　遺構　70……30

　土壙　140……31

　土壙　151……33

　袋状土壙　154……34

　遺構　156・219・220……35

　井戸　157……36

　井戸　197……41

　近世遺構について……49

Ⅳ　おわりに……51

挿図目次

図1　那珂遺跡調査地点位置図（約1/5000）……
図2　那珂遺跡の位置（1/50000）…… 1
図3　調査区全景（西から正面は那珂八幡古墳）…… 2
図4　調査区東半部全景（西から）…… 4
図5　調査区西半部全景（西から）…… 4
図6　那珂19次地点遺跡全体図（1/200）…… 5
図7　溝1・2実測図（1/100）…… 7
図8　溝2土層断面実測図（1/40）…… 8
図9　溝2出土遺物実測図（1/3）…… 9
図10　溝1・2（東から）…… 9
図11　溝2（南から）…… 9
図12　溝2出土遺物（縮尺不同）…… 9
図13　溝4（北半部南から）…… 10
図14　溝4（南半部北から）…… 10
図15　溝4・6・7・10実測図（1/100）…… 13
図16　溝4・6土層断面実測図（1/40）…… 12
図17　溝4出土遺物実測図1（1/3，1/4）…… 13
図18　溝4出土遺物実測図2（1/4）…… 14
図19　溝4出土遺物実測図3（1/4）…… 15
図20　溝4出土遺物実測図4（1/4）…… 16
図21　溝4出土遺物1（縮尺不同）…… 17
図22　溝4出土遺物2（縮尺不同）…… 18
図23　溝6出土遺物（実測図：1/3，1/4）…… 19
図24　溝6完掘全景（南から）…… 19
図25　溝10（7）土層断面実測図（1/40）…… 20
図26　溝10完掘全景（南から）…… 20
図27　溝10出土遺物実測図（1/4）…… 21
図28　溝10出土遺物（縮尺不同）…… 21
図29　土壙43完掘全景（西から）…… 22
図30　土壙43実測図（1/30）…… 23
図31　土壙43出土遺物実測図（1/2，1/3，1/4）…… 24
図32　土壙43土層（上半部，西から）…… 25
図33　土壙43遺物出土状態（東から）…… 25

図34　土壙43遺物（102）出土状態（北から）……25
図35　土壙43出土遺物（縮尺不同）……26
図36　井戸44実測図（1/30）……27
図37　井戸44出土遺物実測図（1/3，1/4，1/6）……28
図38　井戸44出土遺物実測図（1/4）……29
図39　井戸44完掘全景（北から）……29
図40　井戸44出土遺物（縮尺不同）……30
図41　遺構70出土遺物（1/4，1/2）……31
図42　土壙140完掘全景（北から）……31
図43　土壙140土層断面（西から）……31
図44　土壙140実測図（1/30）……32
図45　土壙151実測図（1/30）……33
図46　土壙151完掘全景（西から）……34
図47　袋状竪穴154実測図（1/30）……34
図48　袋状土壙154完掘全景（東から）……35
図49　遺構156全景（東から）……35
図50　井戸157実測図（1/30）……36
図51　井戸157出土遺物実測図1（1/3，1/4）……37
図52　井戸157出土遺物実測図2（1/4）……38
図53　井戸157出土遺物（縮尺不同）……39
図54　井戸157遺物出土状況（南から）……39
図55　井戸157完掘全景（北から）……40
図56　井戸197実測図（1/30）……41
図57　井戸197出土遺物実測図1（1/3，1/4）……42
図58　井戸197出土遺物実測図2（1/4）……43
図59　井戸197出土遺物実測図3（1/4）……44
図60　井戸197出土遺物実測図4（1/4）……44
図61　井戸197出土遺物実測図5（1/4）……45
図62　井戸197遺物（343）出土状態（西から）……48
図63　井戸197遺物（607）出土状態（東から）……48
図64　井戸197全景（東から）……48
図65　井戸197出土遺物（縮尺不同）……49
図66　遺構198（北から）……50
図67　遺構47（北から）……50

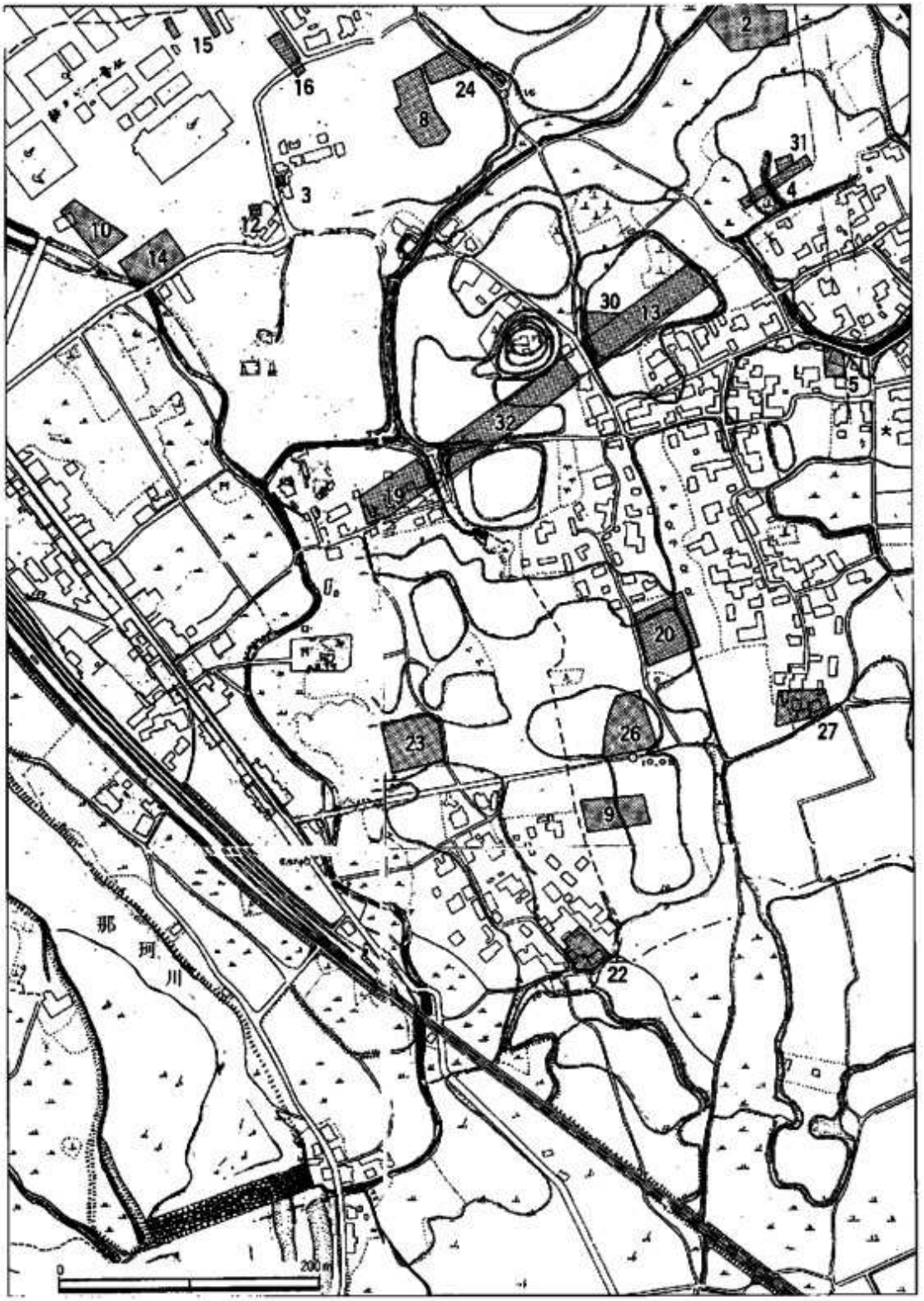


図1　那珂遺跡調査地点位置図（約1/5000）

Ⅰ　那珂遺跡とその調査

Ⅰ－1　那珂遺跡の位置（図2）

那珂遺跡は，那珂川と御笠川に挟まれて，この2河川の間隔が最も狭くなる地域に位置する遺跡である。この地域には，那珂川，御笠川そのほかの河川により，浸食されて中位段丘が，断続して残されている。その段丘上およびその周囲の低地は，遺跡として周知され，発掘調査の手が入れられている区域も多い。那珂遺跡は，そのうちで，最も博多湾に近い段丘を中心とした区域で，北に比恵遺跡と接した位置を占めている。

遺跡のうち，段丘に相当する部分は，頂部の平坦な高まりと，その間を谷部が縦横に切り分けているような地形を呈している。谷部には溜池や，那珂川から御笠川方面への導水を目的するものをはじめ多くの用水路が開鑿されている。但しそれらの多くは，一帯の宅地化の過程で，埋め立てられ，あるいは暗渠とされて，旧状を保つ場所は多くない。

Ⅰ－2　那珂遺跡の発掘調査（図1）

那珂遺跡について，古くは工事あるいは，農作業のおりに資料の発見があったことが，知られている（注1）。発掘調査は，遺跡中央に位置する那珂八幡古墳についての調査が最初のものとなった。再開発と畑地の宅地化の動きが増しており，対応する発掘調査も増加の一途を辿っている。更に都市計画による道路の建設工事が加わることとなった。特に1980年代末以降の調査件数はそれ以前と比べて格段に増加したといえる。そのうち，那珂八幡古墳に対して実施した確認調査を除いては，いずれも遺跡区域内での工事に先立つ記録保存のためのものではあるが，平成3（1981）年度末までに，35次にわたる発掘調査が実施されており，現在もなお進行中である。

図2　那珂遺跡の位置（1/50000）

Ⅱ　那珂遺跡第19次調査の概要

Ⅱ－1　調査に至る経緯

これまでの発掘調査　本次調査は，都市計画道路竹下駅前線の建設工事が計画されたことにより，その工事予定地内の埋蔵文化財を記録保存するために実施したものである。

この道路は，那珂遺跡推定区域のほぼ中央部を，北東から南西の方向に直線状に横断する幅20mの構造物である。このうち，遺跡東辺部の地点を第４次調査として，また，中央部の地形の最も高い地点を第13次調査として調査をすすめ，昭和63年度事業として，今回報告する第19次調査に至ったものである。この事業に係る埋蔵文化財の発掘調査は，残る部分を第34次調査として平成３（1991）年度に実施し，これをもって那珂遺跡区域の調査を完了したことになる。

事前調査　昭和63年度事業用地は，那珂遺跡でも中央西辺部で，段丘の縁辺に相当する部分と考えられた。

道路建設工事を担当する土木局街路課との協議を経て，教育委員会埋蔵文化財課では1988年３月，予定地内の試掘調査を実施した。調査は，埋蔵文化財課事前審査班が担当した。用地内に６本の試掘溝を設定した。結果として，西端部は，攪乱が著しく遺構の遺存の可能性がなく，この部分を除外した1,600㎡について調査対象とするという判断を得た。試掘調査の結果を受けて協議を進め，記録保存のための発掘調査を埋蔵文化財課埋蔵文化財第一係が担当することとなった。

図３　調査区全景（西から正面は那珂八幡古墳）

Ⅱ－2　調査の経過

東半区の調査　調査の現場作業は，1988年１月26日，表土剥ぎから開始した。表土は，機力により除去することとし，排土を場内で処理する必要から，調査区を東西に分けた。まず，東半区から調査に着手した。隣接する塀の養生のため，約１ｍの引きをとり，必要な部分には，バリケードを設置した。表土剥ぎを開始する時点で，隣接民家への進入路の確保のため，予定より西に寄って調査区を設定せざるを得なくなった。そこで，東端

部を調査する必要の有無を確認する目的で予定地東北端に調査区を設けた。結果として削平がひどく，遺構は遺存せず，調査対象から外すこととした。

調査は，表土剝ぎと並行して遺構の検出を進め，順次掘り上げ，実測を進めていった。表土の深さは，全体としては0.3m乃至0.4m，造成部分で0.7m程であった。調査区内には，建物の解体に際して埋め込まれたとみえる廃材の詰まった廠穴2箇所により，遺構の一部が大きく破壊されていた。調査区の東寄りで南北方向の溝のほかに土壙，小穴等を調査した。

西半区の調査　東半区の調査を終わり，排土を東半区側へ返し，西半区の表土剝ぎに着手したのは，3月8日である。西半区でも，東半区と同様の問題が生じ，住宅への進入路を確保するために段落ちの肩部分までの調査とすることとなった。調査区内には，建物の基礎が残されており，それの間を縫っての調査となった。基礎掘型部分に遺構が遺存している可能性を考え，一旦掘り上げて確認する作業をおこなった。

西半区の調査を終了したのは3月22日で，続いて埋め戻し作業を終え，現場を撤収したのは3月24日である。

調査の方法　記録について，平面上の基準は，13次調査と同様，道路建設計画の基準点によった。高さの基準は，道路建設のために設置されたベンチマークを利用した。

遺構については，本次調査地点内での通し番号を付し，これを遺構番号として，順次台帳に登録した。実測図，遺物の注記等には，遺構を示す記号「M」とし，これを付して表記した。遺物については，取り上げの単位に対し，記号「R」を付して遺物番号を登録した。遺物番号が，個体の資料を示す場合は収蔵時の登録遺物番号とすることとした。

Ⅱ－3　調査成果の概要

発掘調査の範囲は，先述したような状況から，対象地の東西側を除いた部分880㎡となった。調査区は，東側2/3の部分が，一段低い。高低部分の比高は，1m程である。西側の高い部分は，先述のとおり，建物の基礎により，半ば以上が破壊されている。これにより，井戸など深いものを除き，遺構は消滅してしまったことが考えられる。

調査の結果として，遺物を取り上げて台帳に記載した遺構は，約220基である。出土遺物に加え，覆土の特徴から本調査区内で遺構の時代を考えると，江戸時代以降とみなせるものが70余基，弥生時代，古墳時代はそれぞれ30基前後，中世は40余基，奈良時代の前後から平安時代は10基前後という構成となる。また，遺構の種類別では小穴，柱穴とするものが全体の2/3を占め，遺構の年代と種類との関係をみると，小穴・柱穴は近世とするものの比が小さくなり，それより古い時代のものが多い。つまり，近世より古い遺構には，小穴・柱穴が多い傾向を見て取れる。次章で主要な遺構について説明する。

図4　調査区東半部全景（西から）

図5　調査区西半部全景（西から）

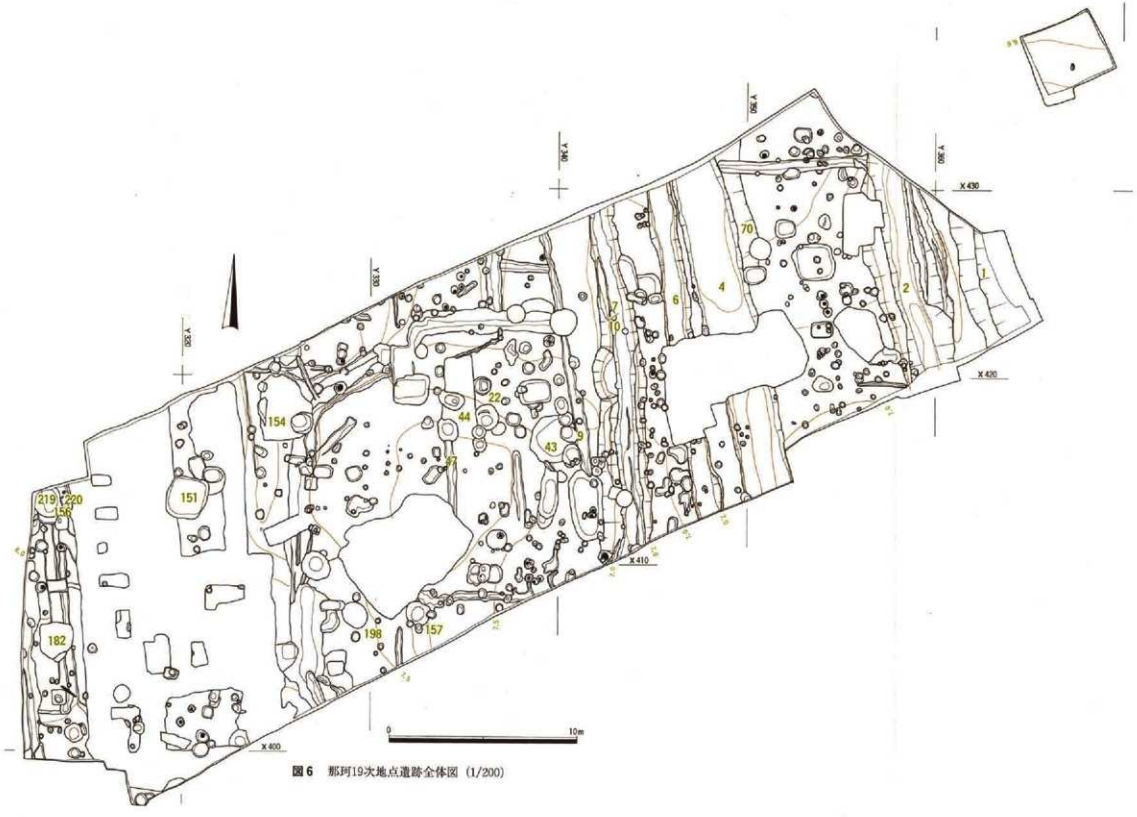


図6　那珂19次地点遺跡全体図（1/200）

Ⅲ　那珂19次調査の成果

溝２　（図　７～９，10～12）

方向をＮ８°Ｗにとる溝である。幅は４ｍを前後し，深さは1.1ｍほどを測る。断面では，上半部の傾斜は緩く，下半部では急になり，自然に崩落埋没した状況が見て取れる。底面は皿状の断面をとる。覆土上部を掘り下げる時点では，肥前系の陶磁器，石炭殻が出土し，江戸時代以降に最終的に埋没したものと考えられる。下部からは図12に示すように，時代の遡る遺物が出土した。土層断面での観察からするならば，埋没後，複数回の掘り直しが行われていること

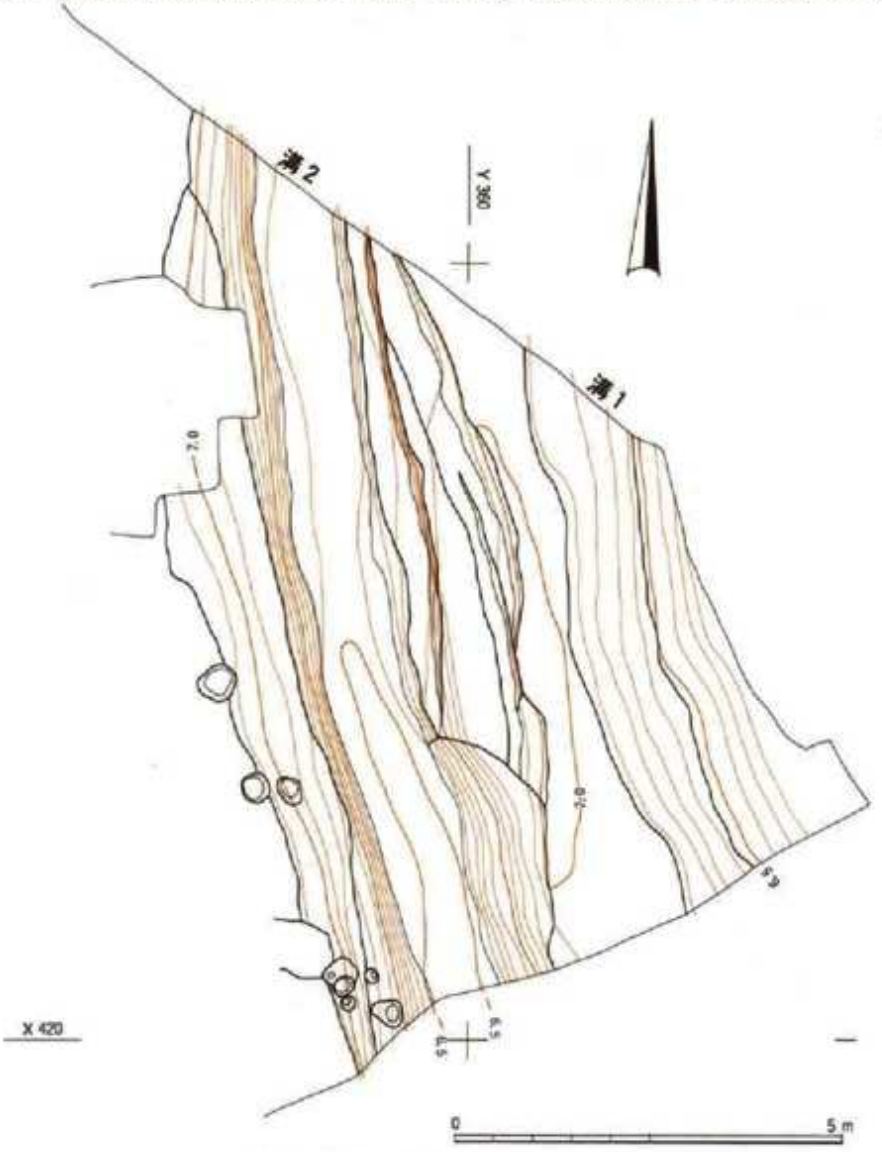


図７　溝１・２実測図（1/100）

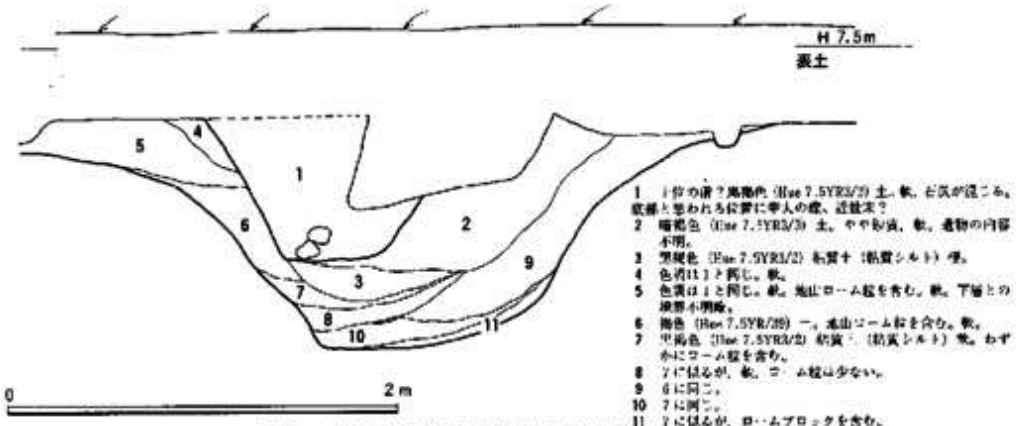


図8　溝2土層断面実測図（1/40）

が窺える。溝東肩部が段状を成すのは，それの結果かもしれない。平面の形状が不整であることの原因は，自然埋没に求めることができまた，そういった部分が遺存していることで，調査区のこの位置では，溝掘削以降，地下げ工事は行われていないことが分かる。

遺物は，溝覆土中から，散漫に出土した。覆土上部と下部とに分離して取り上げた。

溝2出土遺物　（図9・12）

総量でコンテナ2/3程の分量が出土した。このうち，下部出土とした資料が半ばを占める。

土師器坏　**603**は口縁部の一部を欠く資料である。器表，特に外面のそれは凹凸が著しく，底部は糸切り離しの後，さらに刷毛目調整痕が残る。口径12.4cm，底径9.1cm，器高2.6cmを測る。

染付　**604・605**はいずれも碗である。604は全形を復原できる大破片である。口縁部外面に釉は僅かに発泡青みがかって透明である。高台内の露胎部は橙色を呈する。復原口径13.2cm，高台径4.7cm，器高5.0cmを測る。**605**は，底部のみの破片である。釉は細かく発泡し無色透明，高台内へ及んでいる。高台径4.9cmを測る。

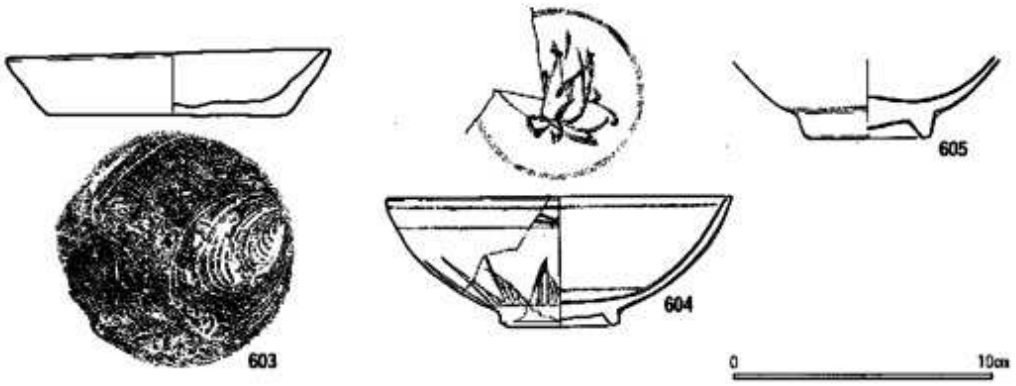


図9　溝2出土遺物実測図（1/3）

図10　溝1・2（東から）

図11　溝2（南から）

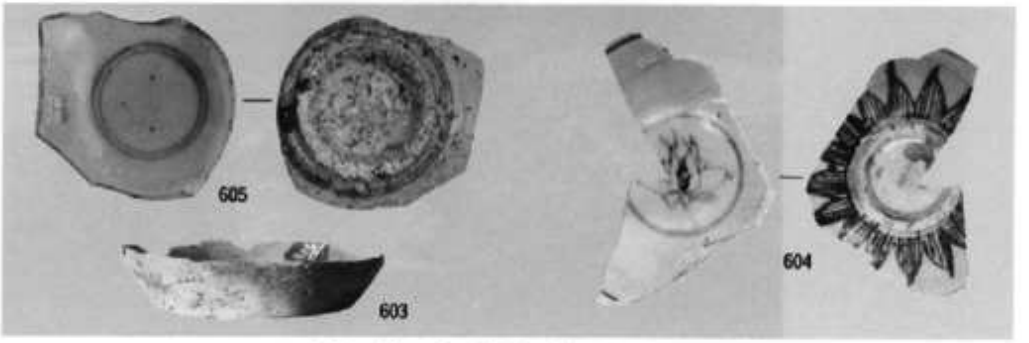


図12　溝2出土遺物（縮尺不同）

溝4　(図13～16)

東半区で検出した。他の溝と似た方向をとり，N11°Wの方向をとる溝である。平面では，直線状でかつ，一定の幅をもつ溝である。その幅，2.7mを測る。断面形は，低い逆台形状を呈し，深さ0.6mを測る。土層断面の観察では，底部の両隅で地山の崩落土がそのまま堆積した状態を保っている。それ以上の覆土の堆積の状況を見ると，中位の層に向かって，地山の崩落土を含む率が小さくなり，夾雑物のない黒褐色粘質土となる。最上部では暗赤褐色土となり，ふたたび地山土の土粒，ブロックを含むようになる。また，底面の高さは調査区内では殆ど高低の差がない。以上から考えるならば，溝4では掘削当初から水が流れる状態になく，恐らくは当初は空濠の状態にあったのではないか，そして自然に埋没が進行してゆき，ある程度のと

図13　溝4（北半部南から）

図14　溝4（南半部北から）

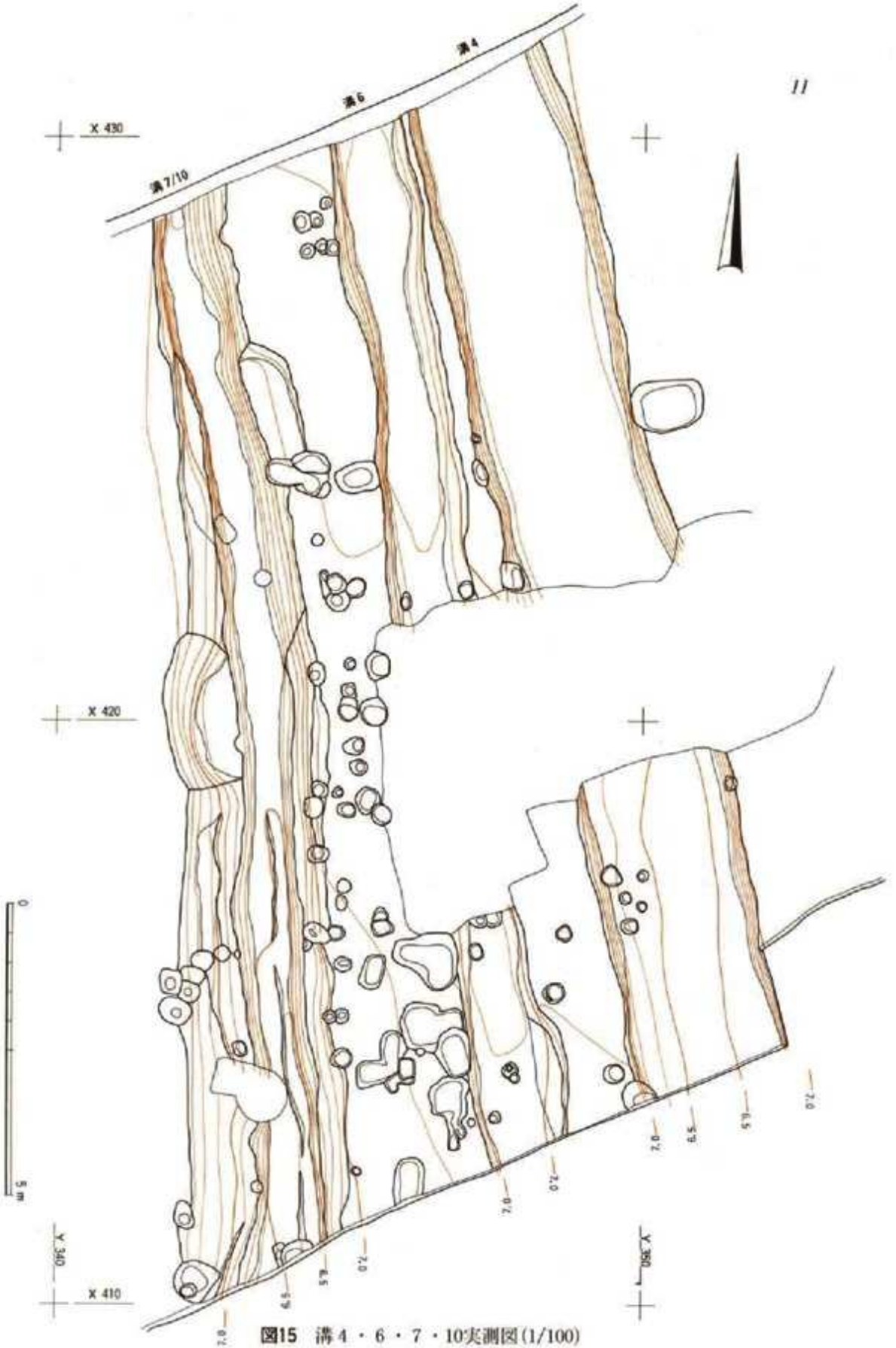


図15　溝4・6・7・10実測図(1/100)

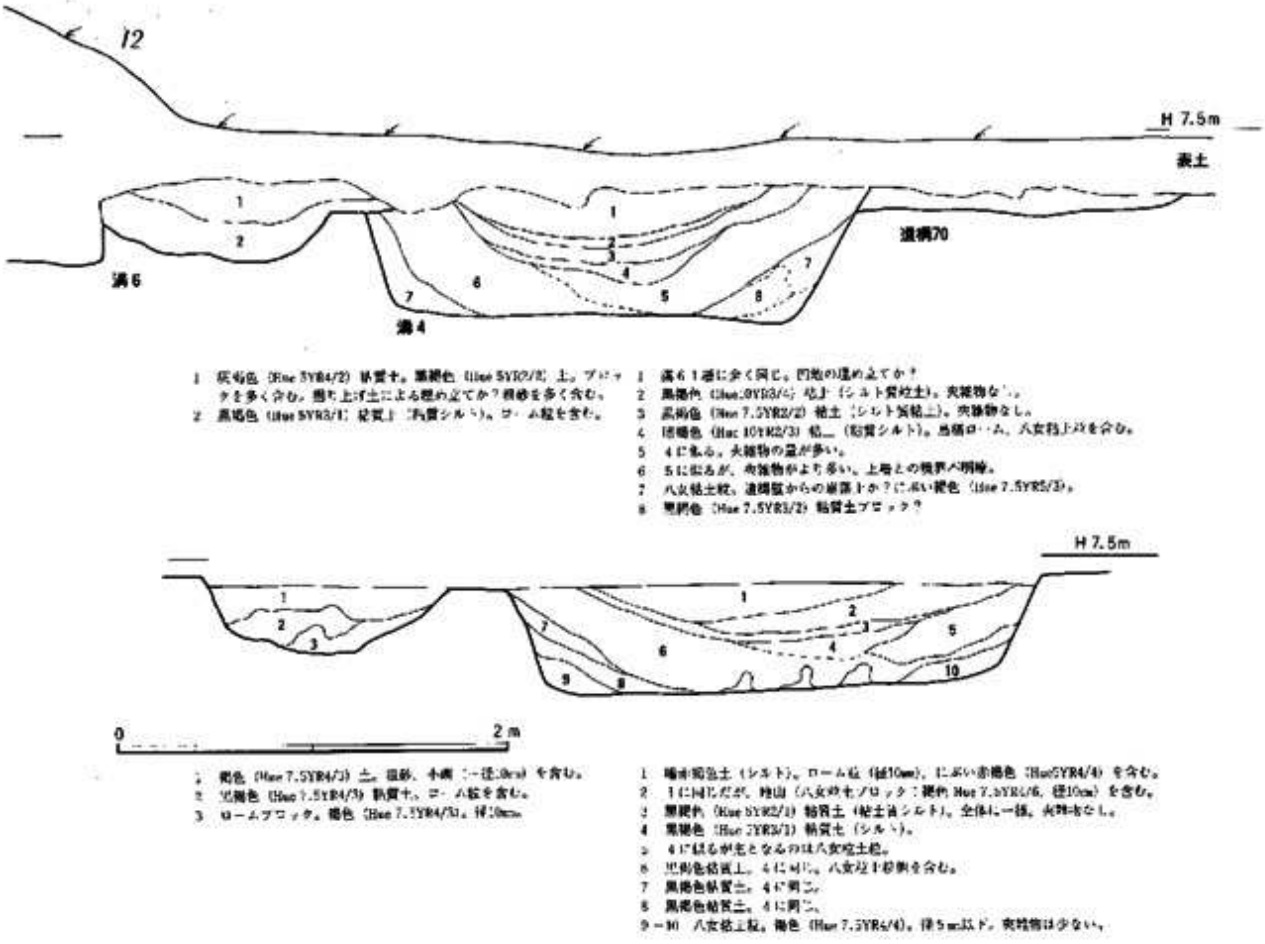


図16　溝４・６土層断面実測図（1/40）

ころで埋め立て，あるいは，より土砂の流入がし易い状態に変わったかしたのではないかとの推測もできよう。溝４には壁の崩落に伴う傾斜の変化した部分が残されておらず，これと覆土の示す堆積状態とを考え併せると，本来は現状よりかなり高い位置に溝の肩が位置していたことも推測できよう。

調査は，覆土を水平に掘り下げていったので，遺物は，１・２層に加え５・６層の一部を上部，以下を下部として記録取り上げた。遺物は，覆土中から散漫に出土した。出土の疎密は認められなかった。ただ，５層，６層の下部で枕大の礫あるいは，獣骨の出土があり，埋没の始まった時点でそういったものを投棄するということが行われたのかもしれない。

溝４出土遺物　（図17－22）

遺物は総量で，コンテナ３箱の分量である。下部出土とした資料がやや多い。その1/4は上師器または弥生土器の細片と分類する資料である。1/4が須恵器の資料である。さらに1/4が瓦の資料である。残りの大部分は弥生土器と古墳時代の土師器である。加えて，奈良時代以降

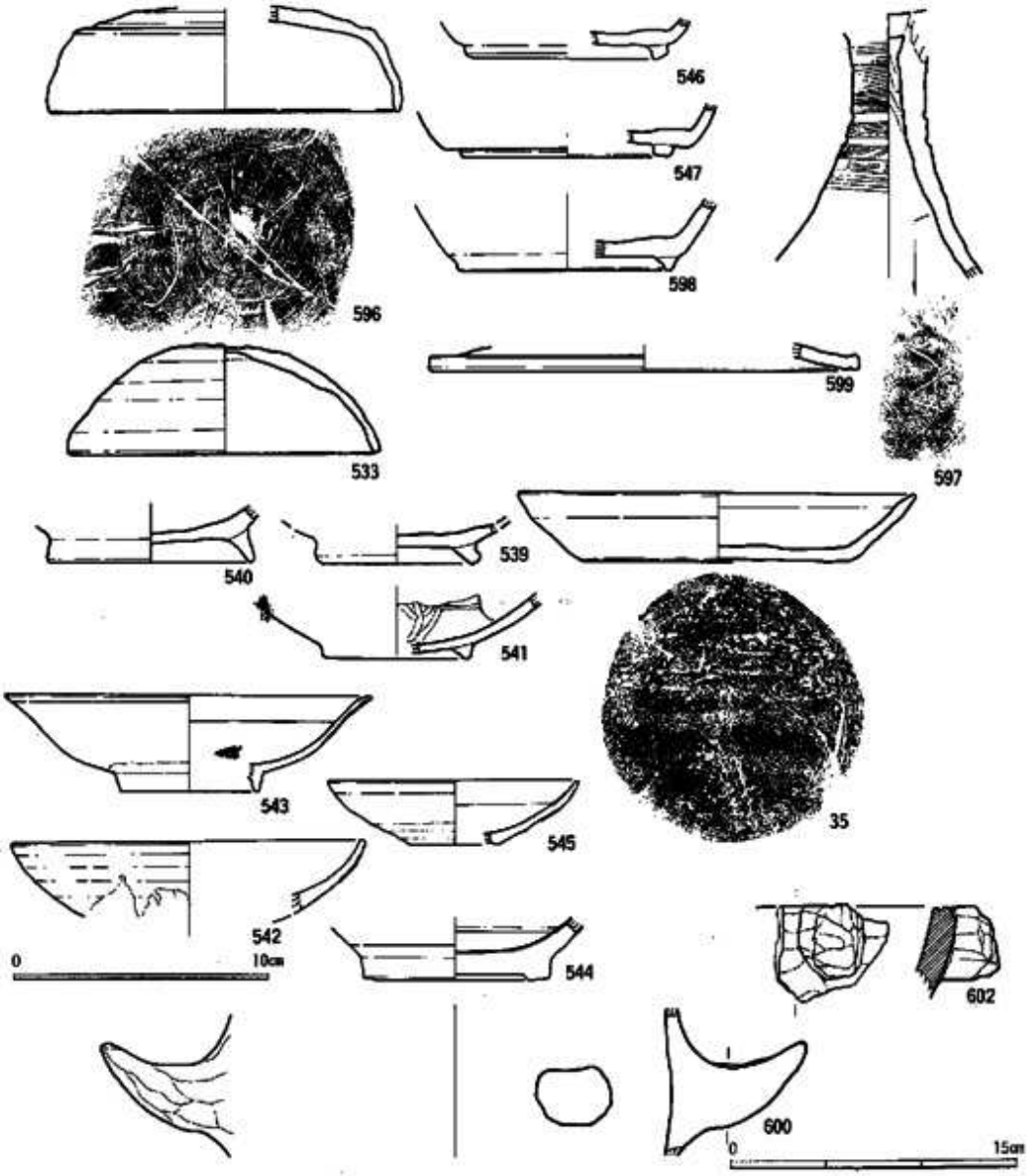


図17　溝4出土遺物実測図1（1/3，1/4）

の土師器，須恵器，さらに陶磁器が少量出土している。以下に主要な遺物を掲げる。

須恵器はすべて破片で出土した。その大部分は甕あるいは壺の資料であるが，細片あるいは小破片のため，それ以上の分類はできなかった。その他には古墳時代の甑類が顕著である。それ以外はいずれも少量の出土である。

須恵器坏蓋**596**は，1/4の資料。焼成堅緻で，復原口径13.7cmを測る。**533**は，全体の1/2の資料である。堅緻である。口径12.4cm，器高4.3cmを測る。**599**は口縁部の小破片である。軟質

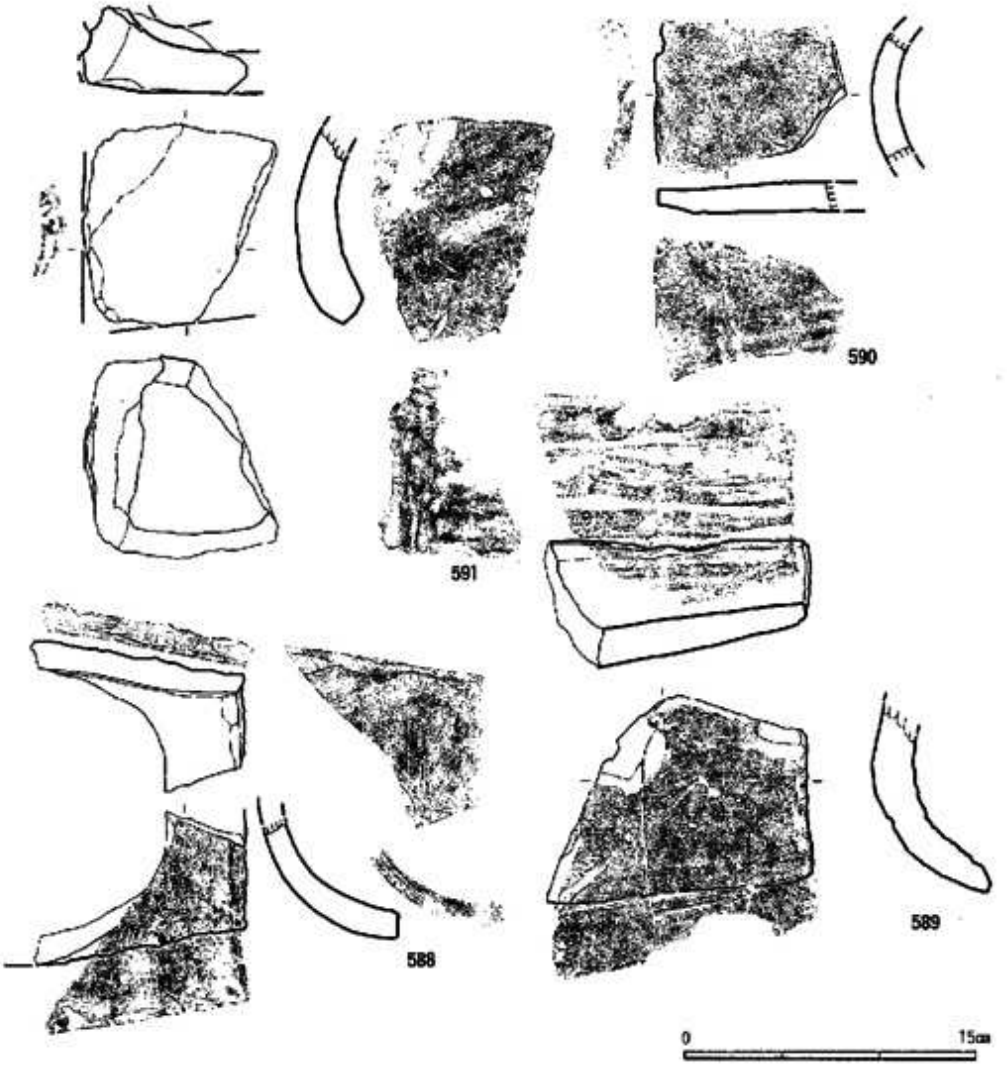


図18 溝4出土遺物実測図2 (1/4)

である。内外面とも灰白色を呈す。口縁部径16.9cmを測る。

須恵器高台坏 **546**は底部の小破片である。軟質で，内外面とも灰白色を呈す。内底外面に板圧痕が残る。復原高台径8.0cmを測る。**547**も底部の小破片で，堅緻である。灰色を呈す。復原高台形8.0cmを測る。**598**は底部の小破片である。胎土は精良で，やや軟質である。断面では，細孔が顕著に観察される。内外面とも灰黄色を呈す。復原高台径8.5cmを測る。

須恵器高坏 **597**は脚部のみでかつ裾部を欠く資料である。上半部に回転を利用した刷毛目調整をおこなう。堅緻である。内外面とも灰色を呈す。裾部に近い内面に篦記号が残る。

土師器は，古墳時代を含め各時期の資料が，量の多少を問わなければ，出土しているが，殆

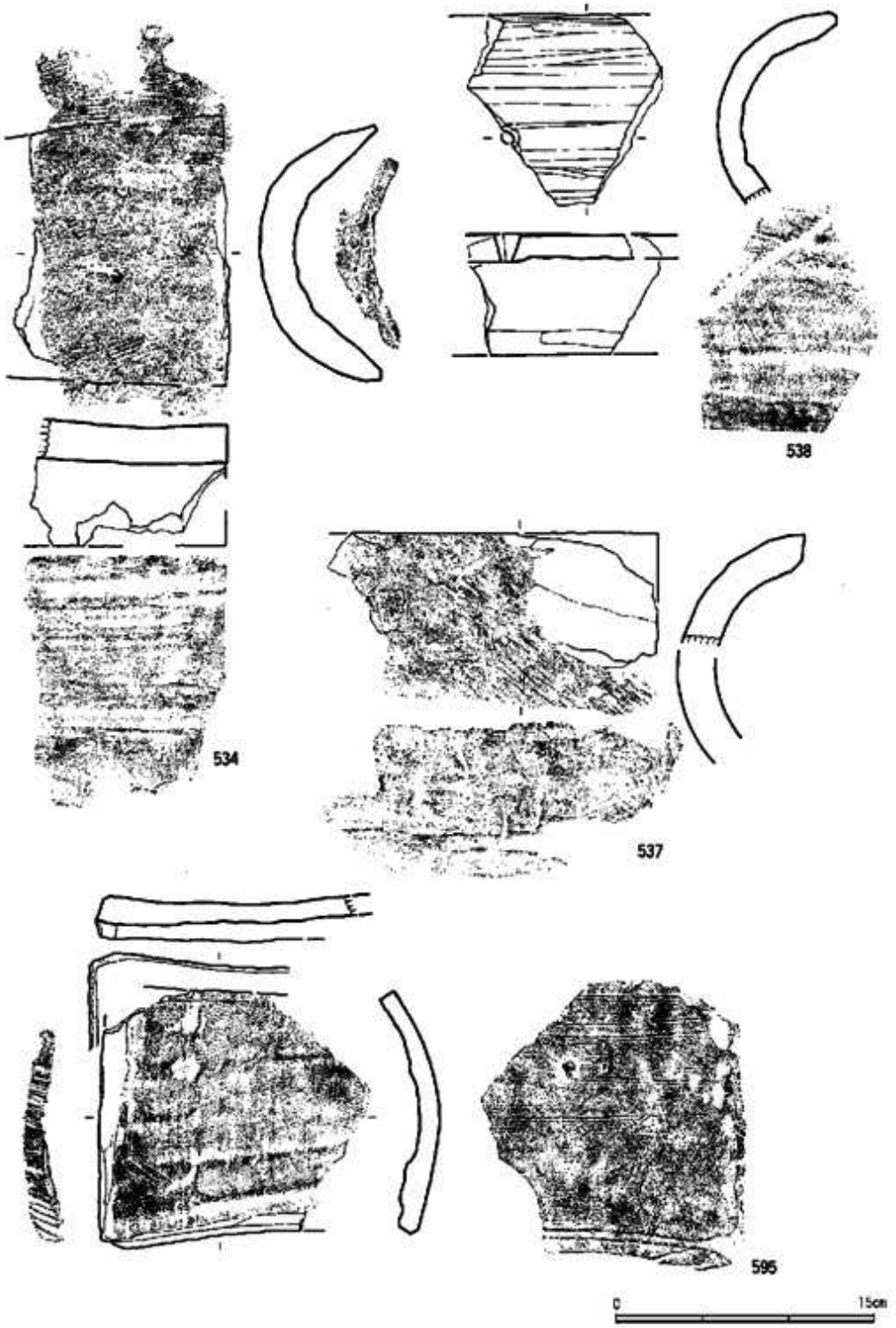


図19　溝４出土遺物実測図３（1/4）

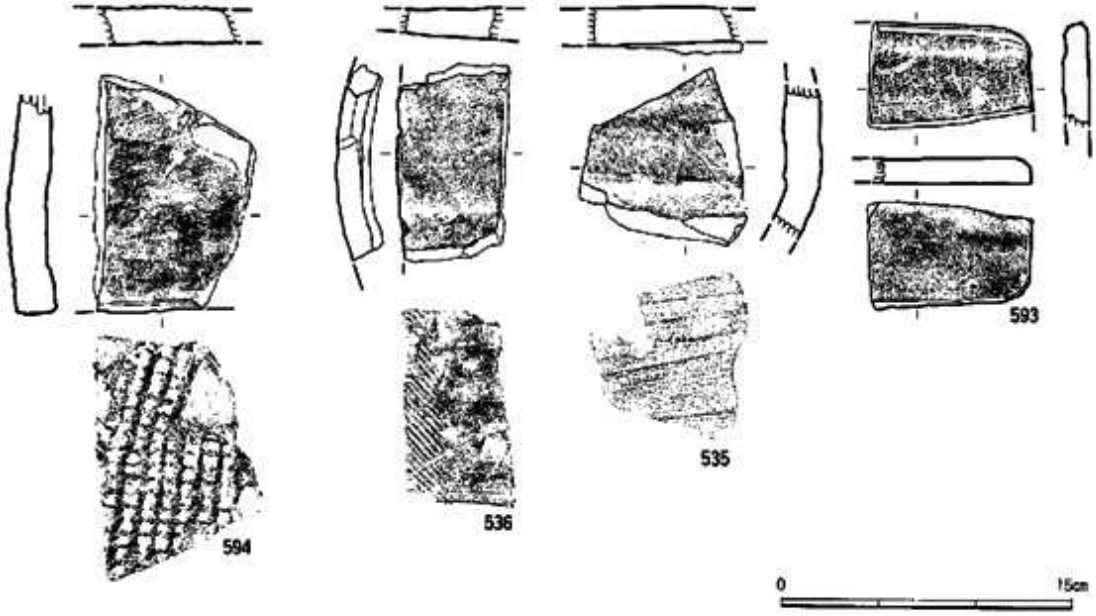


図20　溝4出土遺物実測図4　(1/4)

どが細片あるいは小破片の状態である。

土師器高台碗**540**・**539**はいずれも底部のみの資料である。**539**は軟質で，内外面とも浅黄橙色を呈す。高台径6.5cmを測る。**540**も同様の胎土，焼成で内外面とも灰白色を呈す。高台径7.7cmを測る。土師器坏**35**は，ほぼ完形で，軟質である。器表が剥落する。底面には回転を利用した糸切り離しの後，板圧痕が残される。口径は15.8cm，底径10.7cm，器高2.7cmを測る。

541は瓦器であろうか。底部の小破片で，胎土はやや粒子が粗いが均質で，堅緻である。内面に篦磨き調整を行う。内外面とも灰白色を呈す。高台径6.8cmを復原できる。

陶磁器は極少量が出土した。いずれも小形の白磁の資料である。白磁碗**542**は上半部の小破片である。胎土は精良で白色，釉は細かく発泡する。復原口径13.8cmを測る。**543**は小破片の資料である。胎土は精良でやや樹脂状の光沢をもつ。釉はややオリーブがかり，透明である。外面は口縁近くまで篦削り調整が行われる。口縁径14.3cm，高台径5.4cm，器高3.9cmを復原できる。**544**は底部のみの資料である。胎土は精良で白色，釉はややオリーブがかり透明で硝子光沢をもつ。高台径7.2cmを測る。

土師器**600**は甑であろうか。体部の把手を含む小破片である。胎土に粗粒砂を含み，軟質である。器表の荒れが著しい。

石鍋**602**は，口縁部で把手を含む部分の細片である。外面の全体に煤が付着するが，特に把手下面以下が著しい。滑石製である。

瓦は分量が多く出土しているが，多くは細片というべき資料である。土師質の資料が大半を占めているが，それらはごく軟質で遺存の状態が不良である。

軒丸瓦591は瓦当面を含む小破片である。瓦当面はごくわずか遺存するのみである。外縁部の幅が大きいことがわかる。堅緻で，外面は灰色を呈す。

丸瓦には玉縁をもつ資料は，含まれていない。590は上下面に撫で調整を行う。須恵質で，堅緻である。588は上下面の全体に撫で調整を行う。全体として横断方向の強い撫で調整である。縁部に沿う方向の撫で調整，更に箆削り調整が加えられる。須恵質で，堅緻である。589の上面には長軸方向の撫で調整，下面にも撫で調整を加えている。上面には横断方向の沈線が残る。須恵質で，やや軟質である。534の上面には部分的に叩き目痕が残る。下面の縁部に箆削り調整を行う。須恵質で，堅緻である。538は上面に箆削り調整痕が全面に残る。図上の頂部に釘孔の一部が残る。須恵質で，堅緻である。537は上面には平行叩き目が散漫に残る。土師質で軟質である。器表は浅黄橙色を呈す。

平瓦にも全体を復原できる資料は含まれていない。595は，模骨の圧痕が明瞭である。縁部上下面に面取りの箆削り調整を行う。下面に，撫で調整を行う。須恵質で堅緻である。594は上面は箆削り調整を行い，凹部のみに布目圧痕が残る。叩き成形ののち，軽く撫で調整が加えられている。胎土には粗粒砂をわずかみ含み，須恵質で堅緻である。536は下面では，長軸方向の撫で調整後，縁部に叩き調整が加えられる。堅緻で，器表の色調がにぶい橙色を呈す。ごく堅緻である。535は模骨の圧痕が顕著である。下面には強い撫で調整が施される。堅緻である。器表はにぶい橙色を呈す。593は後縁部の小破片かまたは，熨斗瓦の可能性も考えられるのではなかろうか。下面は全体に撫で調整を行う。縁部には面取りを行う。偏平である。胎土の粒子が荒く，須恵質で堅緻。上面は灰色，下面は灰白色を呈す。

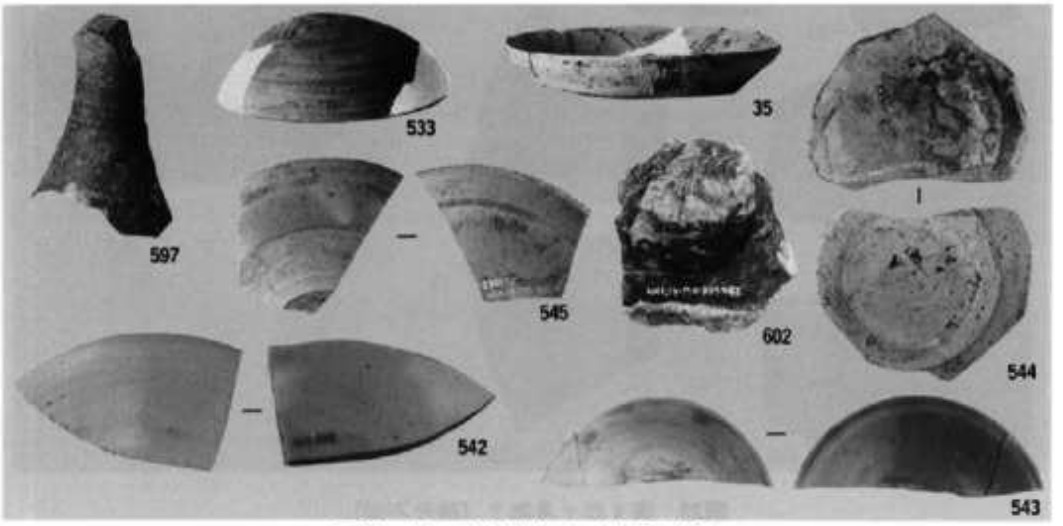


図21　溝４出土遺物１（縮尺不同）

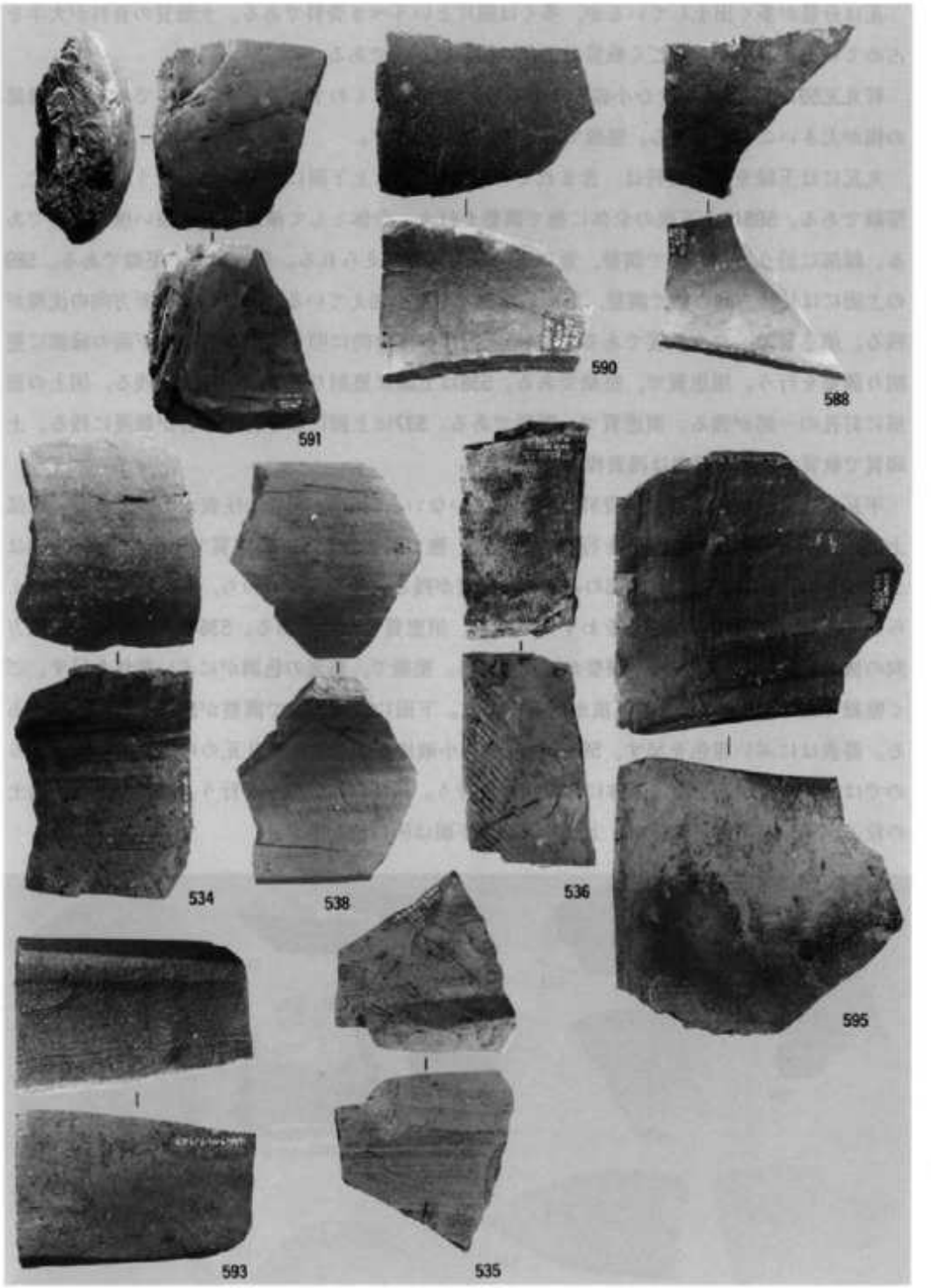


図22　溝4出土遺物2（縮尺不同）

溝6　(図15・16・24)

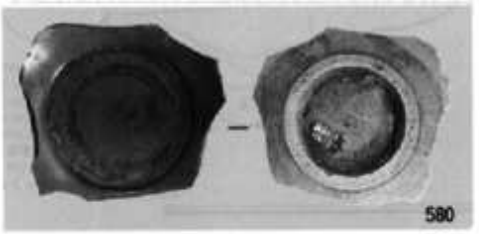
N 5°Wの方向で，ほぼ直線に走る溝である。断面の形状は，壁面の凹凸が著しく，緩いU字形を呈す。底面の標高は6.8m～6.9mほどで傾斜をもたない。遺物は，覆土中から散漫に出土した。

溝6出土遺物　(図23)

出土遺物は，総量でコンテナ1箱程の分量である。半ばが弥生土器或いは土師器の細片である。全体に磨滅の程度が著しい。陶磁器が少量出土した。

白磁碗580は見込み部の釉を輪状に掻き取る。高台径は6.5cmを測る。

平瓦581は上面に撫で調整をおこなう。須恵質で堅緻である。582も同様の資料で，上面の全体に撫で調整を行う。須恵質でやや軟質である。



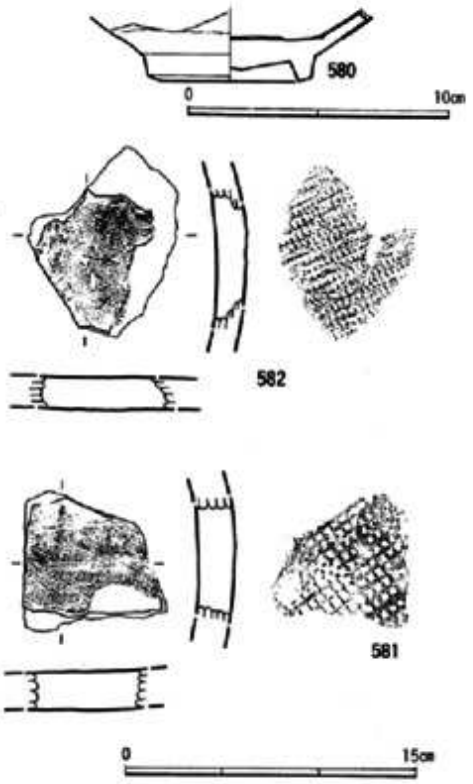


図23　溝6出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

図24　溝6完掘全景 (南から)

溝10　(図16・25・26)

溝6とほぼ並行して走る溝のうち，下位の溝である。緩く弧状をなす。断面形は，逆台形状で深い部分では0.8mを測る。底面には段があり，掘り換え等が考えられるが区分はできなかった。底面は北端で標高6.7m，南端で6.4mとなり，地形とは逆の方向に傾斜する。遺物は覆土中から散漫に出土した。

溝10出土遺物　(図27・28)

総量でコンテナ1/3箱程となる。土鍋，擂鉢，湯釜の破片が1/4を占める。龍泉窯系の青磁碗の資料も含まれている。溝下底近くで竪杵が出土したが，腐朽の程度が著しく，取り上げることができなかった。

土鍋574・575は上半部の小破片資料である。574の外面には口縁端部まで煤状の付着物が，内面にも付着物が残っている。胎土に粗粒砂を顕

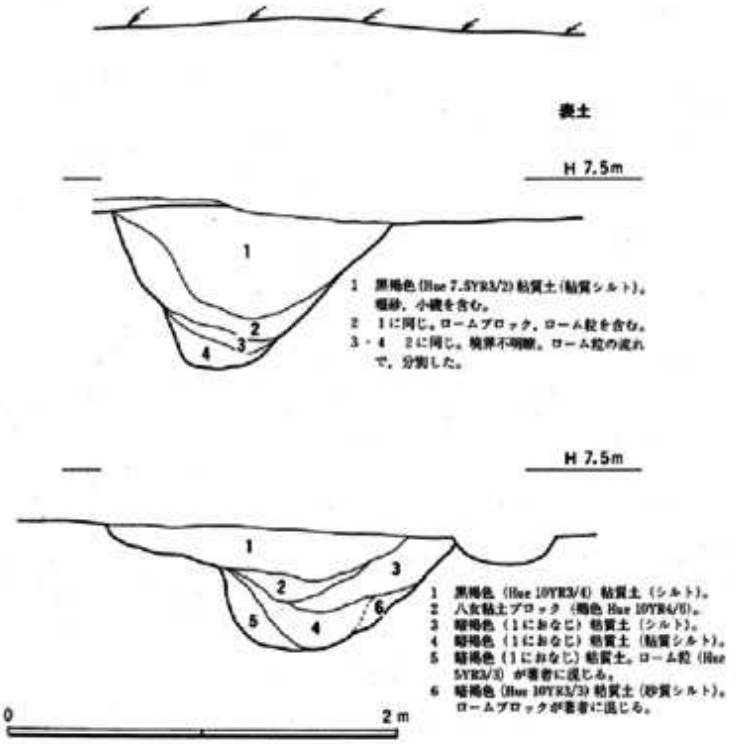


図25　溝10（7）土層断面実測図（1/40）

図26　溝10完掘全景（南から）

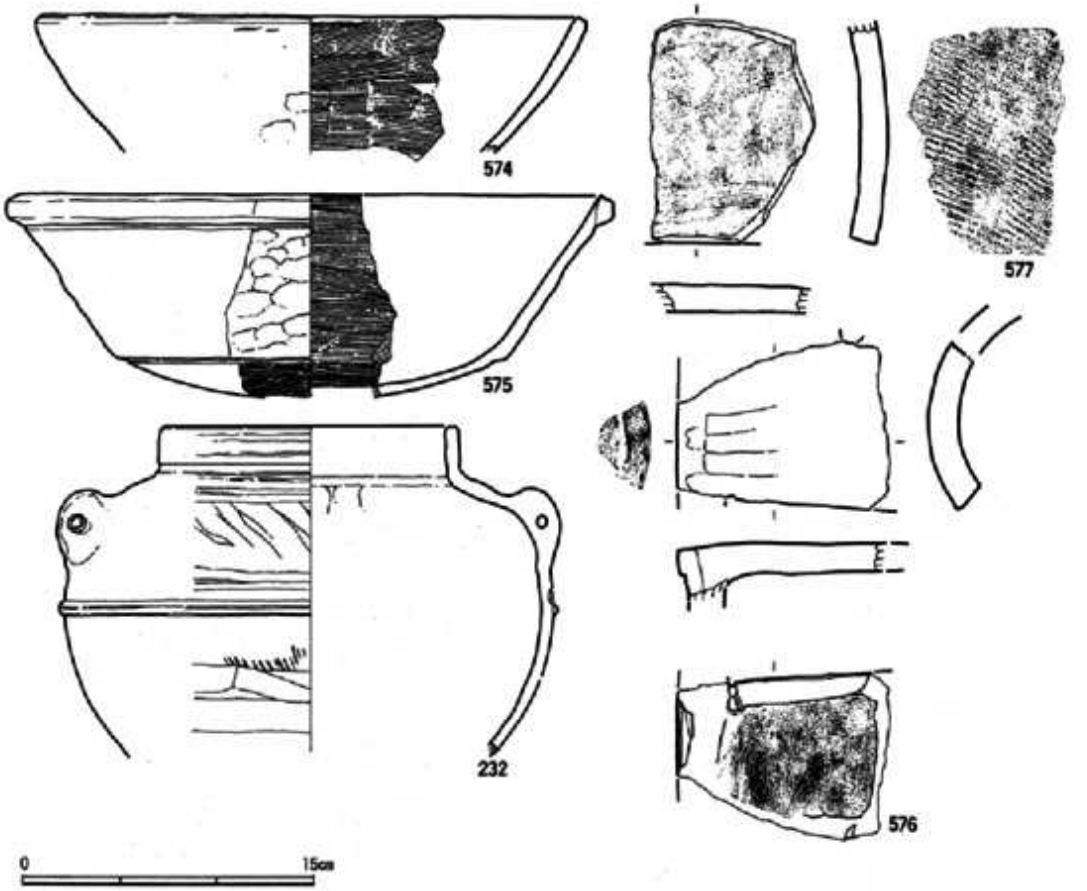


図27　溝10出土遺物実測図（1/4）

著に含み，土師質で堅緻である。復原口径27.8cmを測る。575は底面の縁に回転を利用した篦削り調整を行う。胎土には砂粒を顕著に含み，土師質で堅緻である。復原口径30.0cm，復原底径20.0cmを測る。湯釜232は上半部の1/3の資料である。瓦質である。復原口径14.2cmを測る。

平瓦577は上面は横方向ののち，縦方向の強い撫で調整を行なう，須恵質で堅緻である。器表は灰白色を呈す。軒丸瓦576は，瓦当面と側縁部の一部とを含む。瓦当面は，帯状に一段高い外区をもつ。内区の文様部分に，放射方向の沈線かとみえる部分が辛うじて残る。上下面とも撫で調整を行い，瓦当面に近い上面には長軸方向の篦削り調整を行う。須恵質で堅緻である。器表は灰色を呈す。

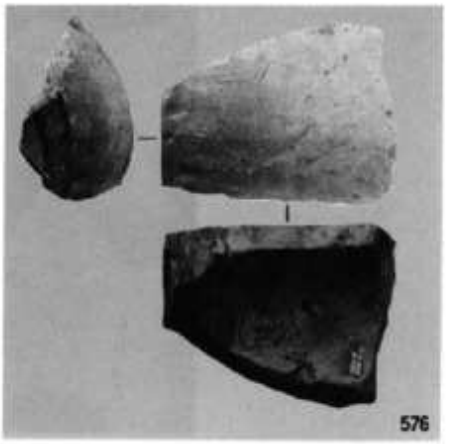


図28　溝10出土遺物

土壙43　(図29・30，32～34)

底面では隅丸の長方形状を呈す土壙である。壁の迫り出しから袋状であったと推測できる。覆土下半部は殆どロームブロックで，一部，流れ込んだ褐色粘土の層が挟まれる。また，南側からの土砂の流れにより，埋没が進んでいる。下半部が埋没した段階で，遺物の一括投棄が行われる。それには後述する陶磁器，硯などのほかに，鉄器，漆塗りの木製品，木材，礫がある。それが覆土の傾きに沿って埋没している。一括投棄の行われた後は，黒褐色あるいは暗褐色の覆土の間にロームブロックが挟まれるようなかたちで埋没が進行する。遺構北部分の壁は，滑り落ちるような崩落の状態を残す。これにより，板状の木製品がその下敷きになって埋没する。この後，地山土の堆積は顕著ではなく，そのままで放置されていたのかもしれない。ただ，木質が遺存することからは，長期間そのままであったとは考えられない。溝43からは，先に触れた一括遺物のほかに，遺物が覆土中から散漫に出土している。

土壙43出土遺物　(図31・33・34)

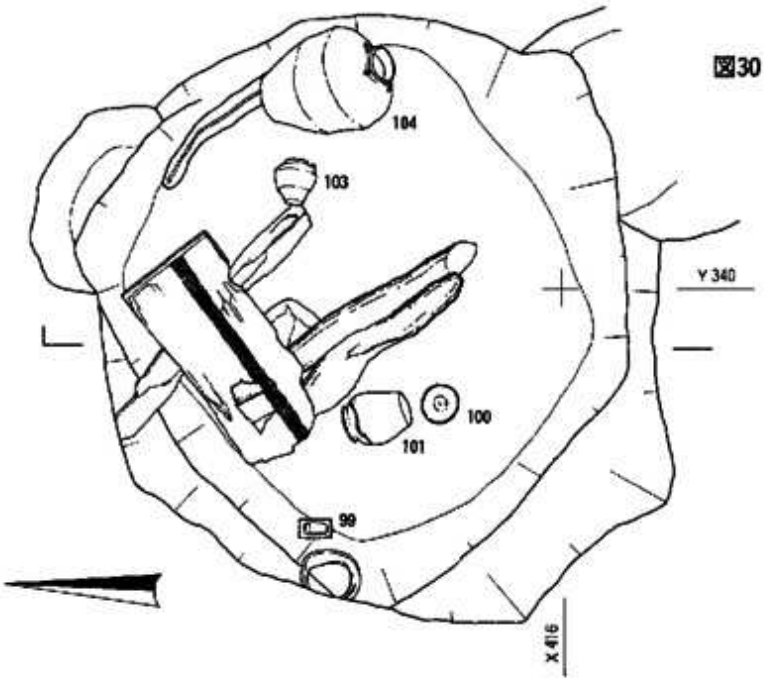
一括出土の資料を除くと，資料の総量はコンテナ1/5箱程の分量である。すべて小破片ないしは細片である。

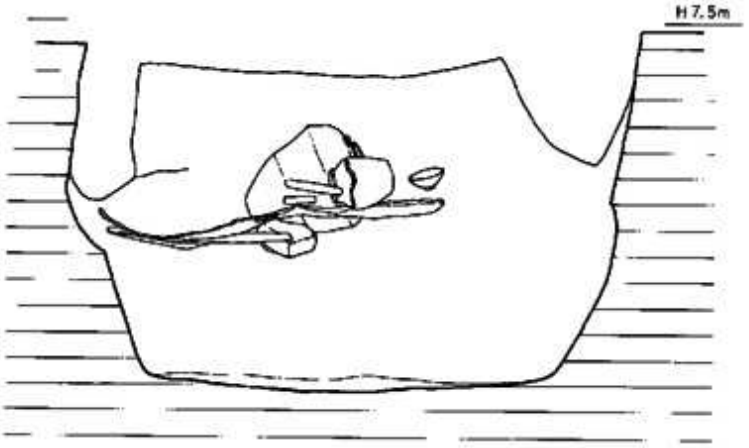
硯99は，石製で，石質は輝緑凝灰岩，長さ12.9cm，幅6.5cm，厚さ1.6cmを測る，硯裏面に銘文が線刻される。同一内容を３行に渡り繰り返している。銘文は「天文十二年　癸卯　十月八」に続けて数文字あるが，報告時点では，以下は不明である。

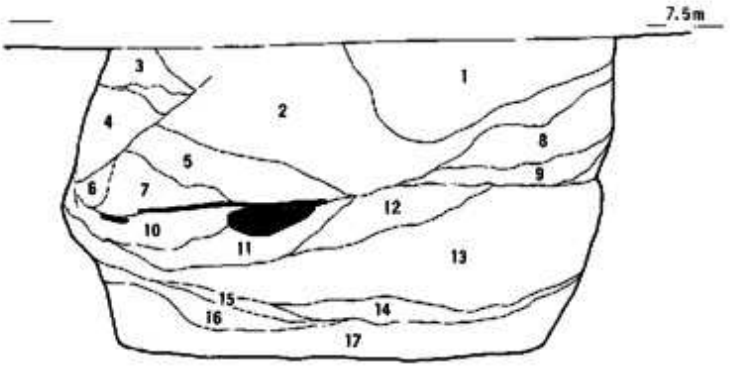
染付碗100は完形の資料である。文様は器面を２対の文様で４区に，更に２対の文様で結果として８区分しその間を，単位文様６段で埋める。対になる文様は同じ意匠となるように配される。見込み部は３区画して同様の単位文様で埋める。口径14.2cm，器高5.2cmである。双耳壺103は完形である。胎土は精良で露胎部は淡黄色を呈す。釉は不透明，にぶい黄色を呈す。

図29　土壙43完掘全景（西から）

図30　土壙43実測図
（1/30）







1．暗褐色（Hue 7.5YR3/3）土（シルト質で粗砂混り）。
2．黒褐色（Hue 7.5YR3/2）粘質土；土器細片を含む。
3．黒褐色（Hue 7.5YR3/2）粘質土。黒褐色腐植土（Hue 7.5YR2/1）ブロックを含む。
4．ロームブロック　φ3cm　褐色（Hue 7.5YR4/6）。
5．黒褐色（Hue 7.5YR3/2）粘質土。ローム小粒を含む。
6．5と同じ。
7．ロームブロック（粒大）4と同じ。
8．ロームブロック　φ2～4に同じ。
9．暗褐色（Hue 7.5YR3/3）粘質土。　小粒のローム粒で軟。
10．ロームブロック　φ3（褐色　Hue 10YR4/6）。
11．暗赤褐色土　ロームブロック混り　（Hue 5YR 3/2）。
12．ロームブロック　暗赤褐土（11と同じ）混り。
13．ロームブロック　黒ドンとロームのみ。
14．ロームブロック　（黒褐下層部分）φ1cm　褐色（Hue 10YR4/6）。
15．褐色粘土　（Hue 10YR 4/4）　ロームの流れ込み。
16．ローム上層　褐色（Hue 10YR4/6）。
17．ローム上層　やや粘土質。

0　　1m

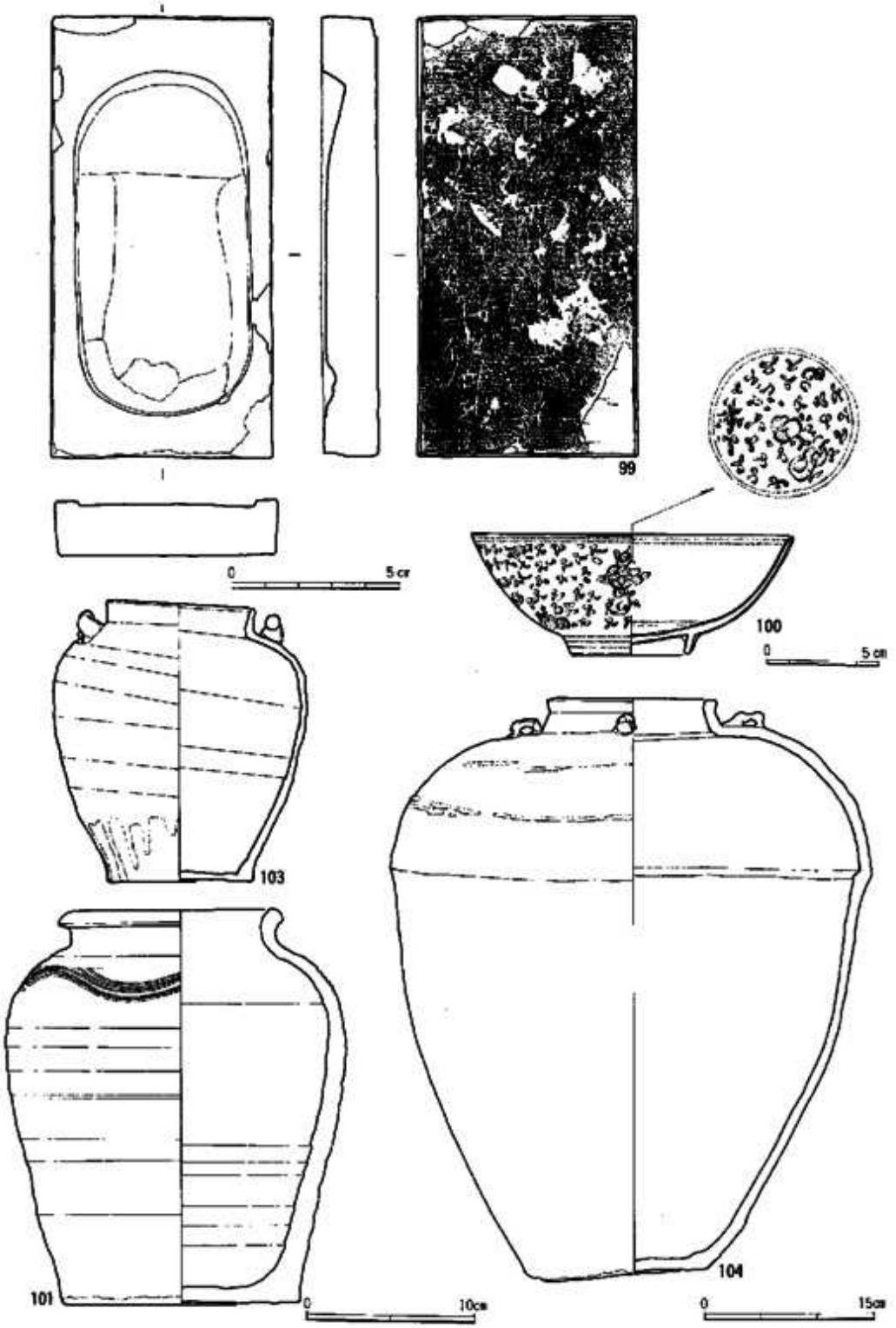


図31　土壙43出土遺物実測図（1/2，1/3，1/4，1/6）

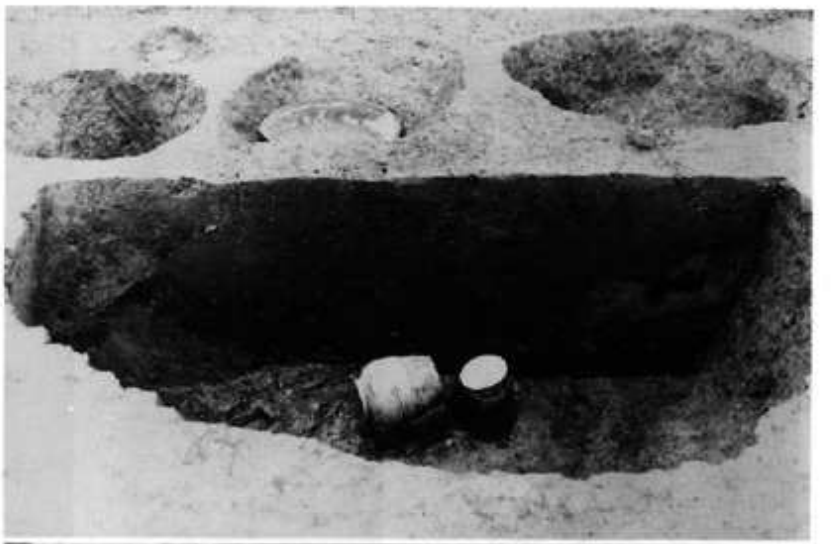


図32 土壙43土層（上半部，西から）

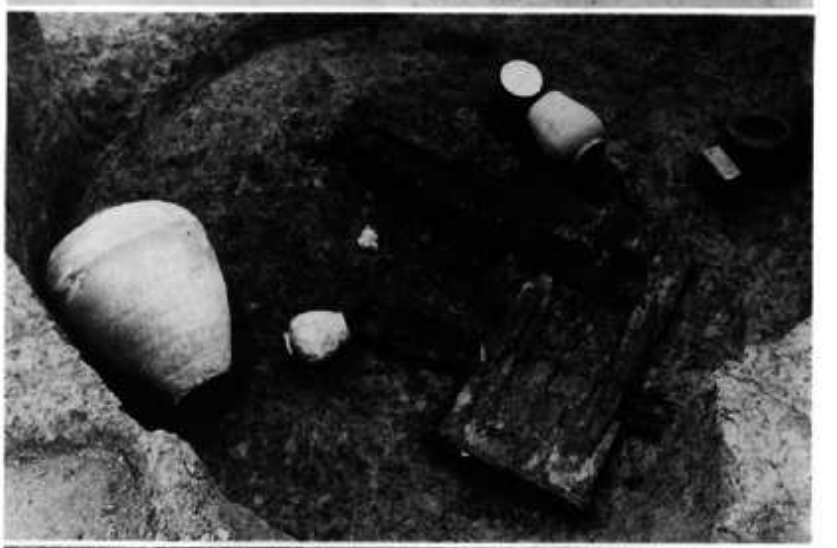


図33 土壙43遺物出土状態（東から）

図34 土壙43遺物(102)出土状態（北から）

木質は腐食が著しい。接合部を布で補強している。

図35　土壙43出土遺物（縮尺不同）

内面の口縁端から外側に施釉されている。器高16.5cmを測る。

無頸壺101は完形である。備前窯系とされる資料である。肩部に回転を利用して波状の条線を描き，上下を撫で消して帯状に整える。堅緻で，器表は橙色を呈す。高23.5cmを測る。

四耳壺104は完形の資料である。底部の縁部に輪状に目痕を残す。肩部に２ないし３条の目痕状の付着物があり，これを境に器表の状態が帯状に変化している。器高51.0cmを測る。

井戸44　(図36・40)

確認面での形状は楕円形をなすが，中位の括れた部分，及び底面は隅丸の長方形状となる。長さ1.4m，幅1.0m，深さ3.4mを測る。抉れ部より下位は，側壁の崩落した粘土ブロックが間に黒色の粘土を挟んで堆積する。それに載るようにして，完形の遺物が出土した。これより上位では，黒褐色粘質土とロームブロックとが流れ込んだような状態で堆積する。

遺物は抉れ部で完形の資料，木器が出土したほかに，それより上位の覆土中からと下位の覆土の黒色粘土部分から少量ではあるが，遺物が出土している。

井戸44出土遺物　(図37・38・40)

井戸44からは，総量でコンテナ2/3程の資料が出土している。弥生土器，土師器の細片が最も多いが，須恵器，瓦の細片も含んでいる。

須恵器碗**606**は1/4の資料で，底部外面に　削り調整をおこなう。堅緻で，内外面とも青灰色を呈す。復原口径11.3cm，復原器高5.7cmを測る。

須恵器甕**570**は口縁部の1/3の資料である。堅緻で，内外面とも灰色を呈す。復原口径16.0cmを測る。同じく**569**は口縁部の1/2の破片である。製作時，口頸部を体部に載せるようにして接合している。頸部の下半には指押さえによるものか，口縁部に対して斜め方向で並ぶ凹部が残る。堅緻で，内外面とも灰色を呈す。

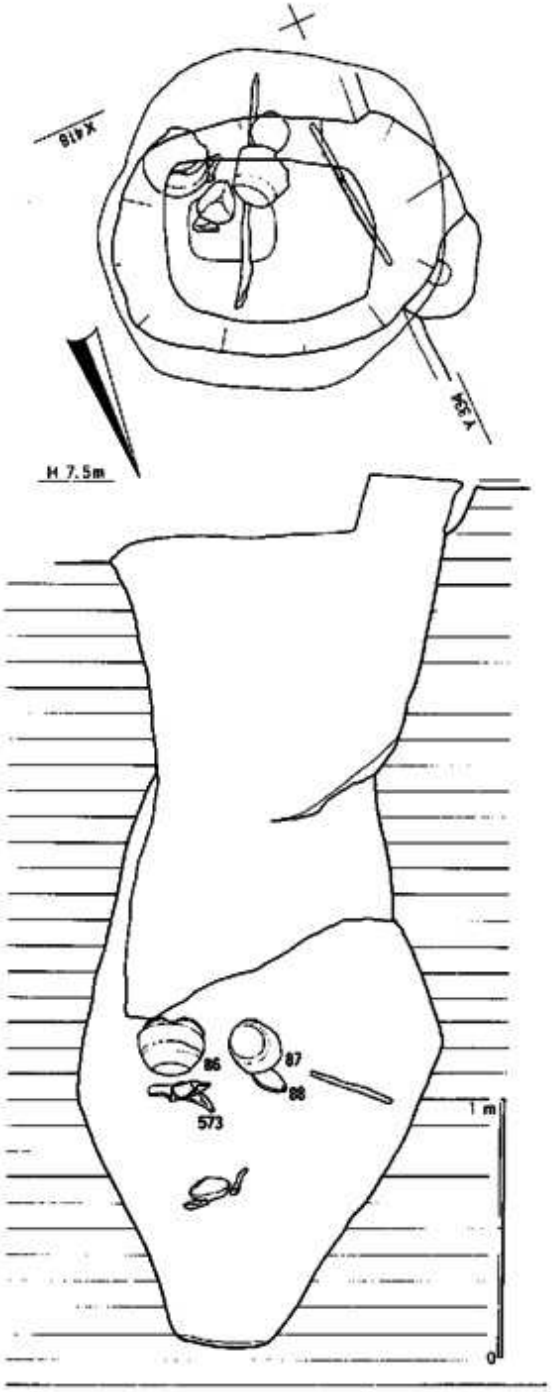


図36　井戸44実測図（1/30）

土師器甕　572・571は胎土に粗粒砂を顕著に含む。572は口縁部の小破片で，軟質である。内外面とも浅黄橙色を呈す。復原口径24.5cmを測る。571も口縁部の小破片である。胎土は粗粒砂を含むほかは精良である。内外面とも灰白色を呈す。復原口径27.2cmを測る。

86は口縁部の一部を欠く資料である。内外面とも回転を利用した成形あるいは撫で調整をおこなう。外面下半部から底面にかけてには回転を利用した篦削り調整が加えられる。胎土には

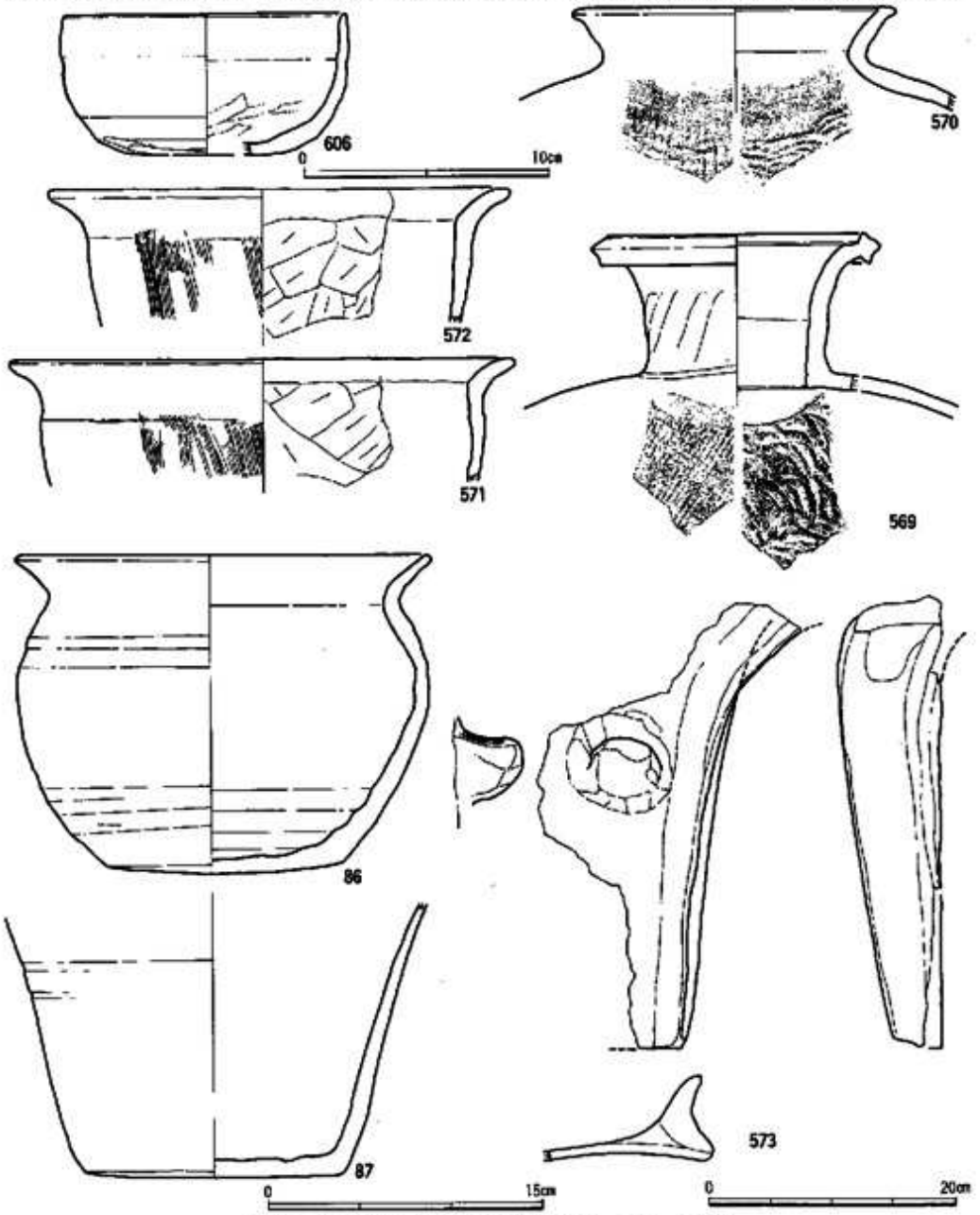


図37　井戸44出土遺物実測図（1/3，1/4，1/6）

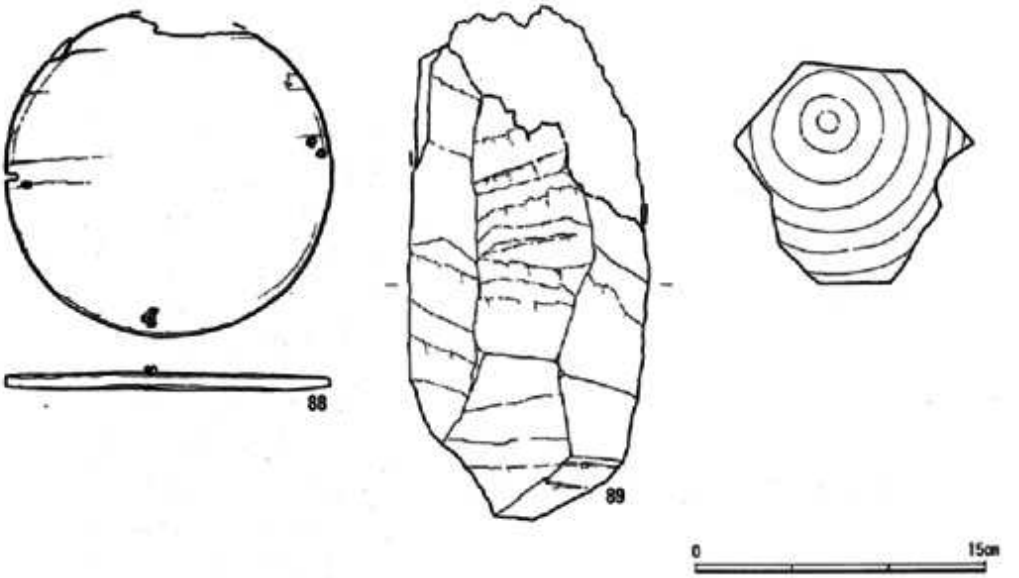


図38　井戸44出土遺物実測図（1/4）

砂粒を僅かに含む。やや軟質である。口径22.1cm，底径12.9cm，器高17.4cmを測る。

87は上半部を欠き形状が不明瞭である。轆轤による成形をおこなうようにみえる。器表の荒れが著しい。胎土に細粒砂を含み，全体に砂質である。やや軟質で，内外面とも淡黄色を呈す。底径14.0cmを測る。

竈573は一部の破片で全形を復原できないが，焚口部片側の破片である。庇接合部は，体部には刷毛目調整を，庇側には粗粒砂を埋め込んでいる。胎土には砂粒を顕著に含み，焼成はごく軟質である。内外面とも淡黄色を呈す。

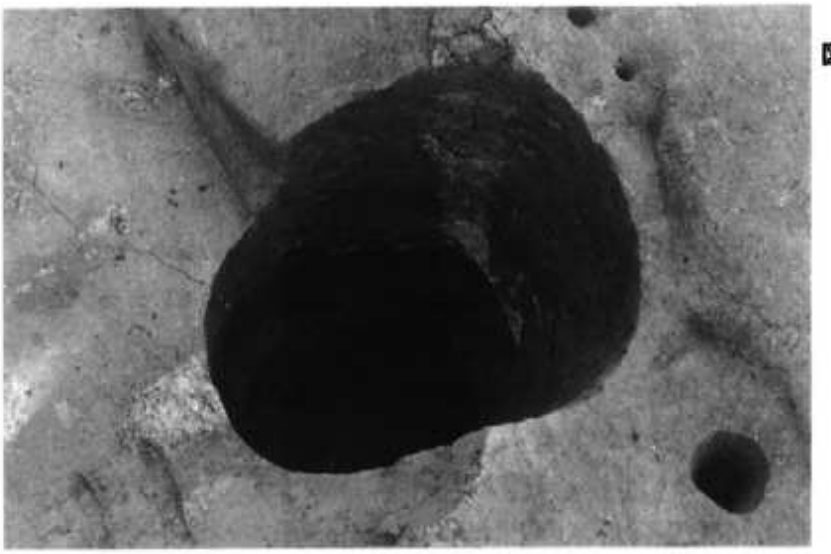


図39　井戸44完掘全景（北から）

図40　井戸44出土遺物（縮尺不同）

曲物**88**は底板のみの資料である。平面形は円形で径17.2cm，厚さ0.8cmを測る。

89は多角形に面取りをした柱状の資料で，片面のみに器表部が残っている。建物柱であろうか。径11.2cmを測る。

遺構70

溝４の東に接し，重複して古い遺構である。平面の形状は不整で溝４に切られていることもあって，一定の形状を復原できない。覆土も黒褐色粘質土がごく浅く残るのみで，壁の立ち上がりなども確認できない。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は覆土中から散漫に出土した。

遺構70出土遺物　（図41）

総量でコンテナ1/4箱。土器はすべて弥生土器である。いずれも器表の荒れが著しい。

甕は胎土に粗粒砂を顕著に含み，軟質である。**587**は口縁部の資料で，内外面とも橙色を呈す。復原口径21.2cmを測る。**583**も口縁部，器表が薄い層状に剥離する。復原口径27.4cmを測る。585は底部の1/4の破片である。内面は浅黄橙色，外面はにぶい橙色を呈す。

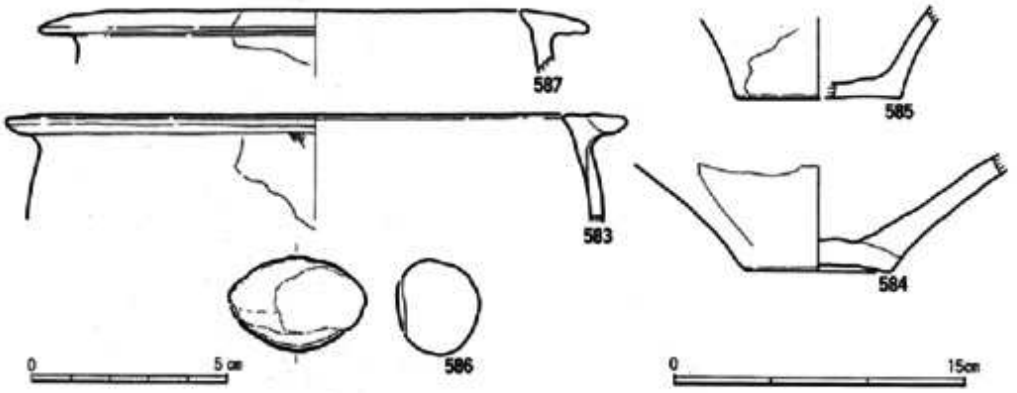


図41　遺構70出土遺物（1/4，1/2）

壺584は底部の1/2の破片である。器表の殆どは剥離している。一部に丹塗りの痕跡を残している。胎土に粗粒砂を顕著に含む。軟質である。内面は橙色，外面はにぶい橙色を呈す。

土製投弾586は胎土に粗粒砂をごく僅か含む。やや軟質で，にぶい褐色を呈す。

土壙140　（図43～45）

溝７・10と重複し，それより古い遺構である。確認面では隅丸の長方形状を呈す。壁は直に立ち上がり断面の形状は深い箱型を成す，長さ1.9m，幅1.3m，深さ1.1mを測る。覆土は一様で，地山ロームのブロックである。地山の各部のブロックが混ざりあった状態で遺構を埋めている。土壙底面にも有機物等による汚れはない。

遺物は覆土中から散漫に出土した。すべて弥生土器の細片あるいは小破片で，中期に属するものとおもわれる資料が出土している。

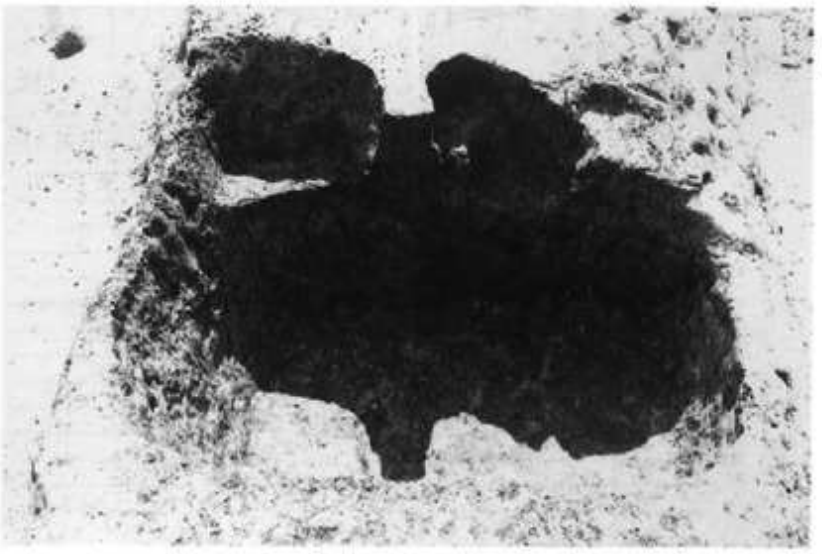
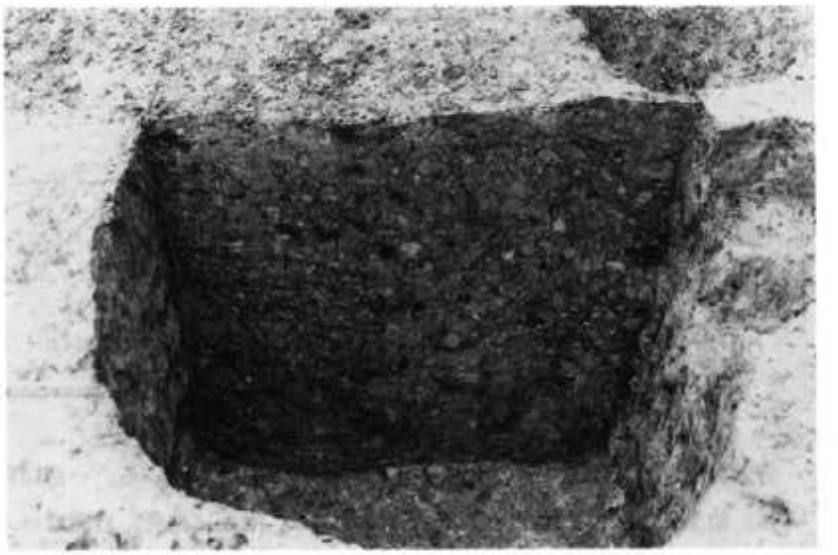


図42　土壙140完掘全景（北から）

図43 土壙140土層断面(西から)



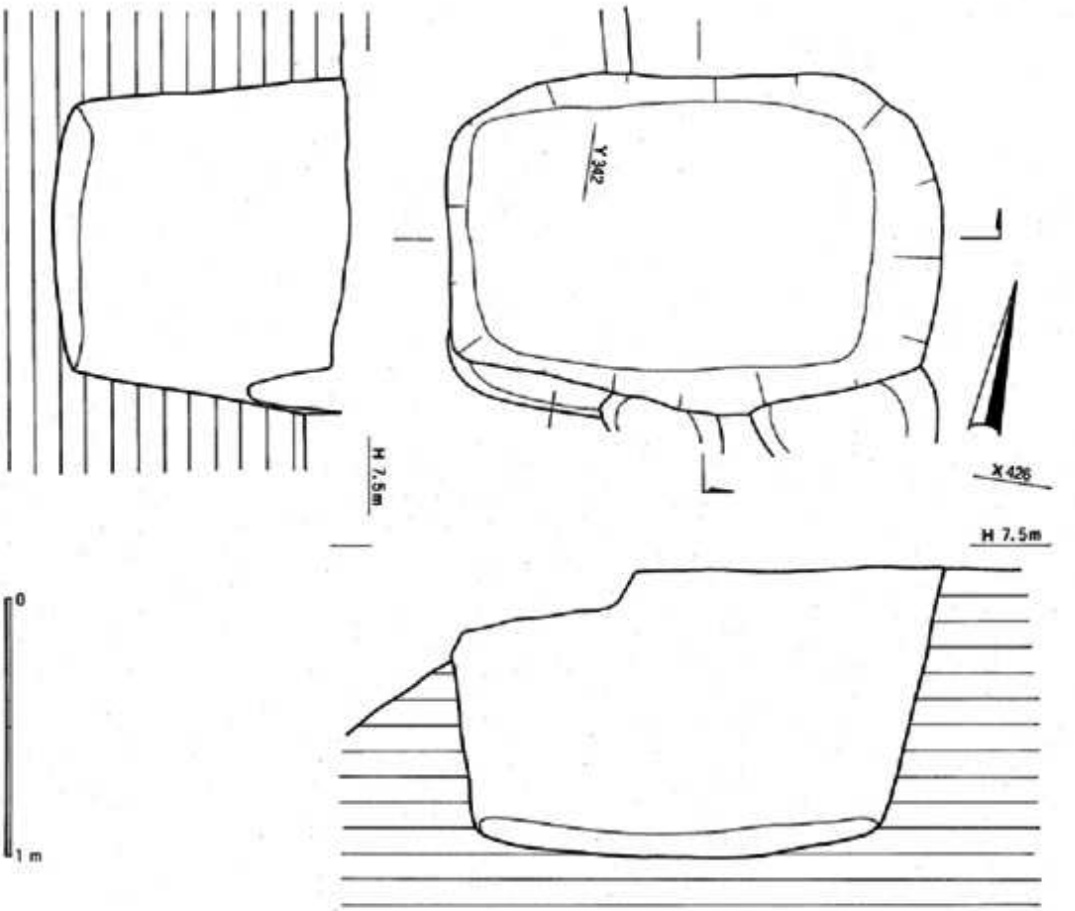


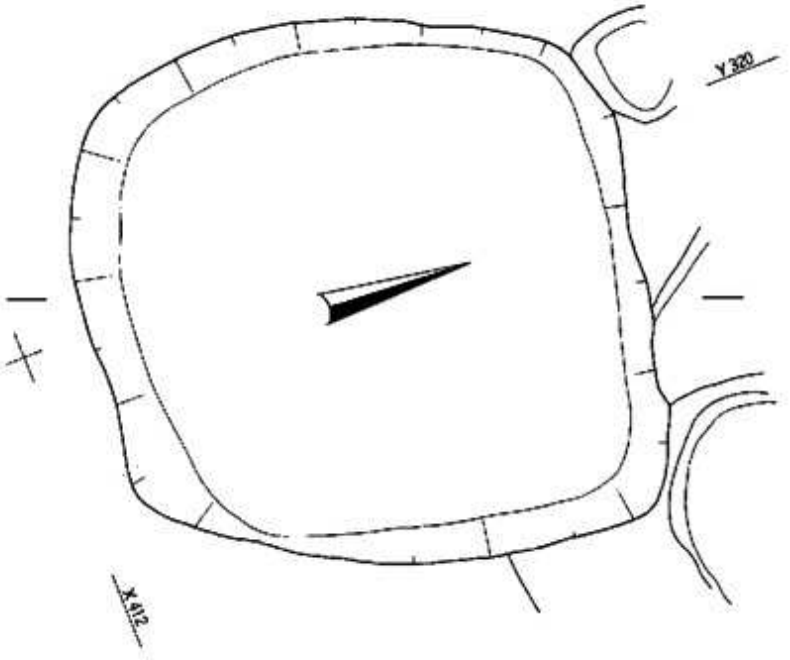
図44 土壙140実測図 (1/30)

土壙151　（図45・46）

確認面で不整な正方形状を呈する土壙である。断面では不整な台形状を呈す。平面上では長さ2.2m，幅2.1m，深さは0.5mを測る。土層断面を観察すると，覆土は暗褐色ないし褐色の粘質土で軟質である。上部の層には粗砂が混じる。一部にはマンガン斑がみられる。また，底部近くを除き灰白色の八女粘土ブロックが含まれ，他で掘り上げた排土が混じり込んでいるようにも思われる。また，見た目に灰色味が強く，水分の多い状態が続いたようにも観察される。

遺物は少量が覆土中から散漫に出土した。染付碗，湯釜，上鍋の細片が含まれているほかに，土師質の平瓦，須恵器の細片も伴っている。

図45　土壙151実測図
（1/30）



1　暗褐色（Hue 10YR4/3）粘質土（粘質シルト）。
2　褐色（Hue 7.5YR4/3）砂混じり粘質土（砂質シルト）。軟。マンガン斑。
3　褐色（2に類じ）粘質土（粘質シルト）。軟。マンガン斑。
4　暗褐色（Hue 7.5YR3/3）粘質土（粘質シルト）。軟。
6　赤褐褐色（Hue 7.5YR2/3）粘質土。強。ローム粒多？比較的短時間に埋まる？底近くを除き，灰白色の八女粘土ブロックが含まれ，掘り上げ土が（他遺構の）が，含まれているようにも，みえる。見た目は，灰色味強く，水分の多い状態が，続いたようにもみえる。

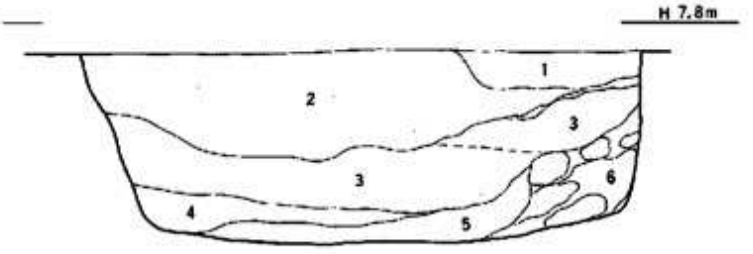


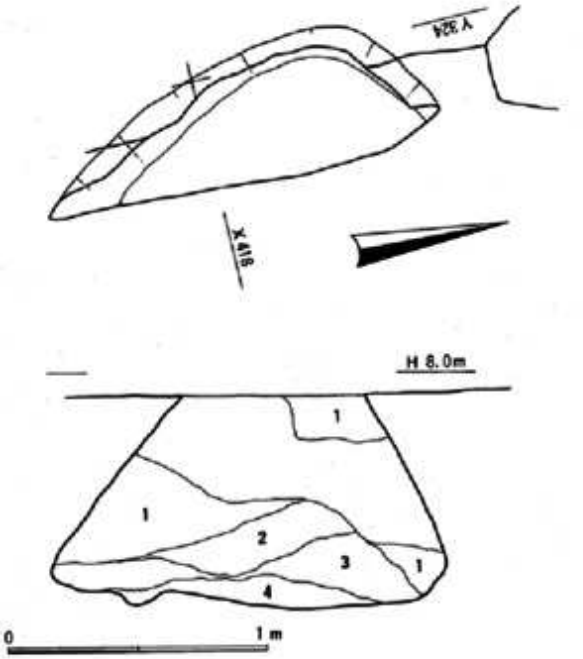
図46 土壙151完掘
全景(西から)

袋状竪穴154 (図46・47)

調査区西半部の高い位置で検出した。大部分を，工事の際の掘削により破壊されている。平面の形状を殆ど留めていないが，辛うじて袋状であることは分かる。断面形状は，フラスコ状をなすものと思われる。覆土は，上部に工事による攪乱が入り，観察できないが，他の同時期の遺構に通有の暗赤褐色，あるいは黒褐色の粘質土である。底面近くにロームブロックの堆積がある。現状は，確認面で幅1.0m，底面で幅1.9m，深さ1.0mを測る。

同様の遺構は那珂13次地点でやはり，独立した1基を調査している。

遺物は，覆土中から少量が出土した。いずれも弥生土器の細片ないしは小破片で，なかに中期後半かと思われる資料があるだけで，遺存の状態が不良のためそれ以上の区分ができない。



1 暗赤褐色 (Hue 5YR3/2) 粘質土。微かに砂粒を含む。土器片が顕著。
2 黒褐色 (Hue 5YR2/2) 粘質土。ロームブロック顕著。
3 ロームブロック。にぶい赤褐色 (Hue 5YR4/4)。強粘質。
4 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4) 粘質土。硬。

図47 袋状竪穴154実測図 (1/30)

図48 袋状土壙154 完掘全景（東から）

遺構156・219・220 （図49）

調査区北西隅で一部を調査した。調査区西半部の一段高い部分は，出土遺物の構成からあるいは，覆土の特徴からより古い時期に属するとみなせる小穴，柱穴が分布している。そのなかで，確認面で土壙状の遺構の重複したとみえる部分があり，掘り下げたが，明確な重複関係，形状を掴むことができなかった。掘り上げた時点では，３基の土壙の重複した結果と判断された。２基は平面形状が楕円形，１基は隅丸の長方形を成すもののようである。その場合，計測可能な楕円形の219で，長さ1.5m以上，幅1.4m，深さ0.4m程を測る。遺物は覆土中から散漫に出土している。弥生土器とみられる細片ないし小破片の土器片である。

図49 遺構156全景図（東から）

井戸157　(図50・55・56)

確認面では，不整な楕円形状を呈す。断面形状は，底面に向かって次第にすぼまっており，井戸としては湧水の痕跡を残していない。長軸方向で1.4m，短軸方向で1.1m，深さ2.3mを測る。底面は平坦である。覆土は，暗褐色粘質土の部分と地山ロームブロックからなる部分とが識別できた。上部では暗褐色粘質土層の一部に，壁に沿ってロームブロックが流れ込んだような状況が観察された。それより下部ではローム粒の混じる部分が全体に広がる。その下位で遺物が集中出土する部分を検出した（図54）。図示するように，遺物を含んだ覆土が急な角度で滑り落ちるようにして埋没していった状況を見て取れる。遺物の集中出土部分は2箇所あることがわかる。さらに，底部近くの覆土中からは完形の土器を含む，一群の遺物が出土している。以上のほかに覆土中から遺物が出土している。

井戸157出土遺物　(図51～54)

遺物の総量は，完形の資料を除いてコンテナ2/3箱程の分量である。2/5が弥生土器，大形の土師器の細片ないし小破片である。1/5が土師器坏，碗に分類できる資料である。1/5が須恵器である。細片あるいは小破片で古墳時代以降奈良時代まで

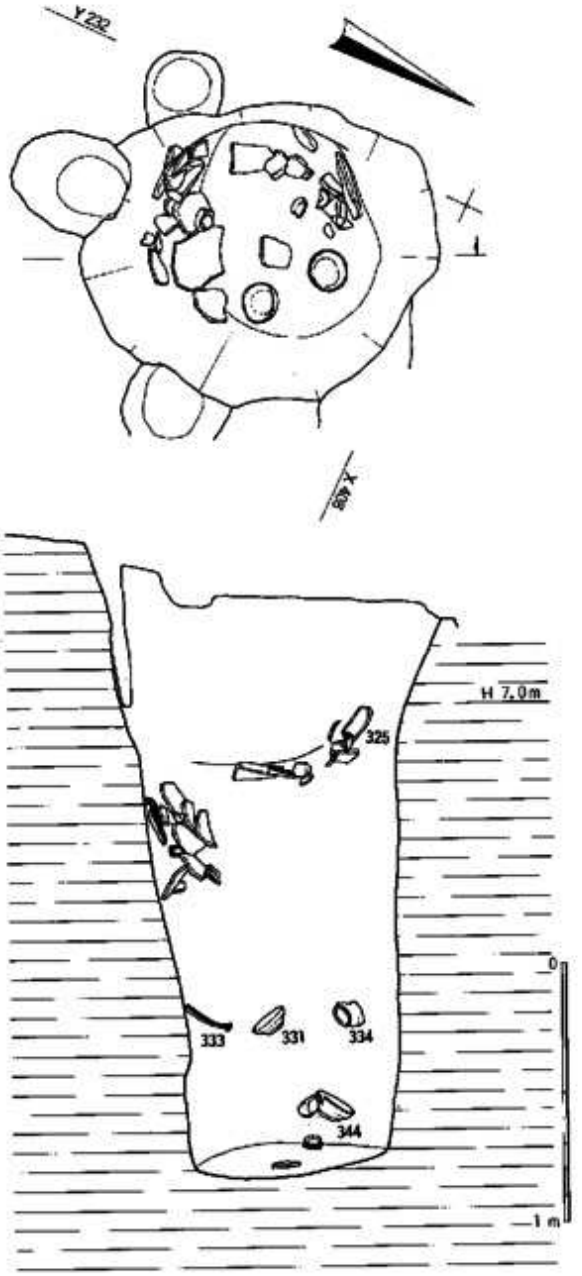


図50　井戸157実測図（1/30）

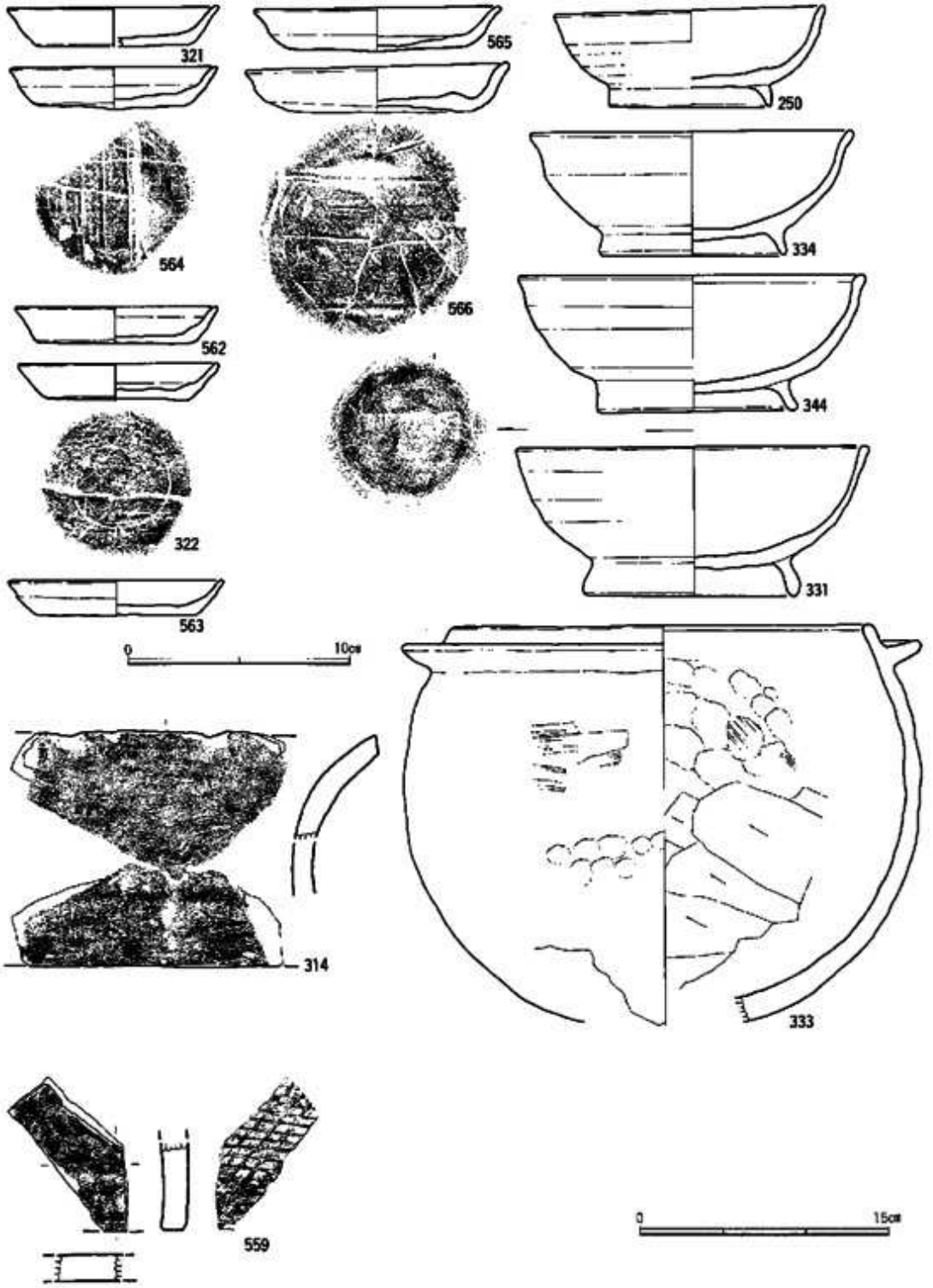


図51　井戸157出土遺物実測図１（1/3，1/4）

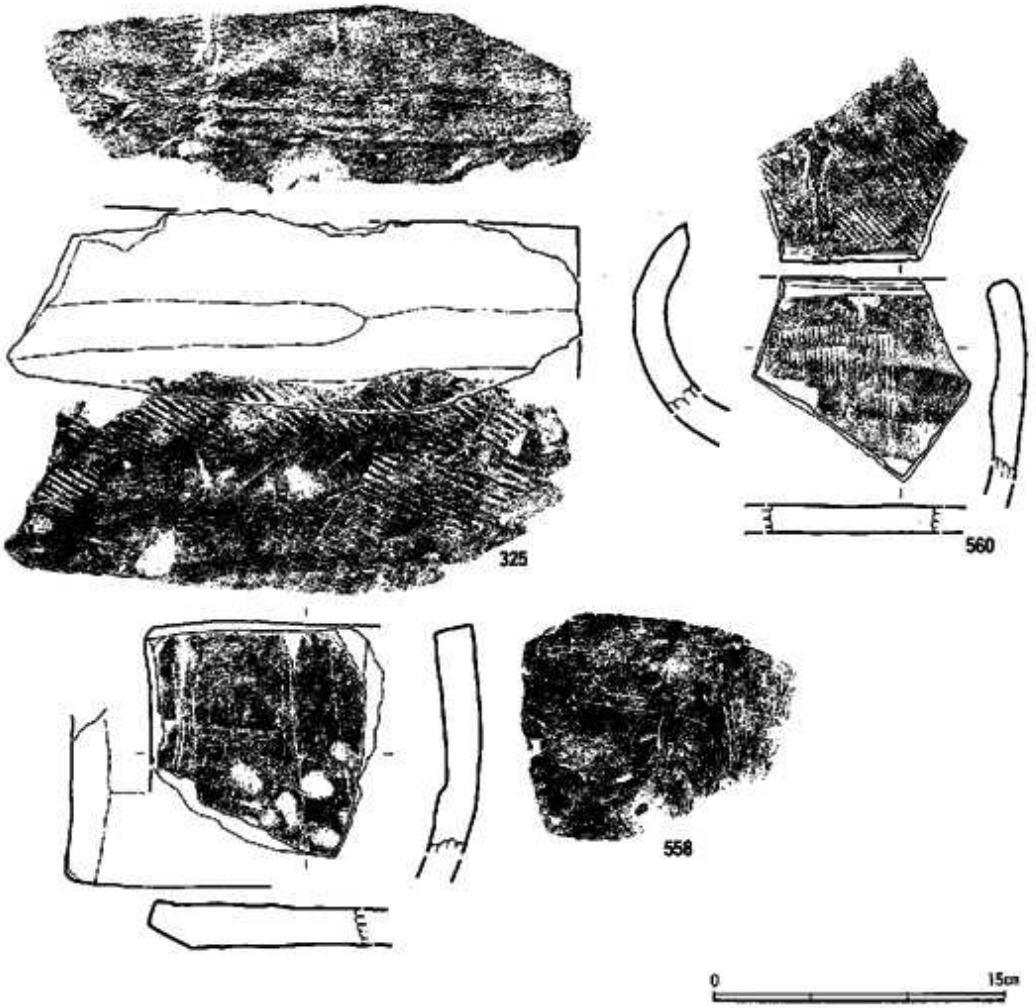


図52　井戸157出土遺物実測図２（1/4）

の資料である。瓦も1/5程の分量を占める。以下，個別に説明する。

土師器皿　篦切り離しをおこなう。底面に板圧痕が残されている。**321**は全体の1/3の破片である。軟質で，器表の荒れが著しい。内外面とも灰白色を呈す。**564**は1/3を欠く。堅緻である。**562**は口縁部の1/3を欠く。堅緻で，内外面とも灰白色を呈す。**322**は口縁部の半ばを欠く。やや軟質で，器表の荒れが著しい。内外面とも灰白色を呈す。**563**は1/4の破片である。堅緻であるが，器表の荒れが著しい。内外面とも浅黄橙色を呈す。**565**は1/3の資料である。やや軟質であり，内外面とも灰白色，底面の内外面は灰黄褐色を呈す。**566**は口縁部の一部を欠く。やや軟質で，内外面とも浅黄橙色を呈す。内底面には付着物であろうか，中央部が灰黄褐色を呈す。

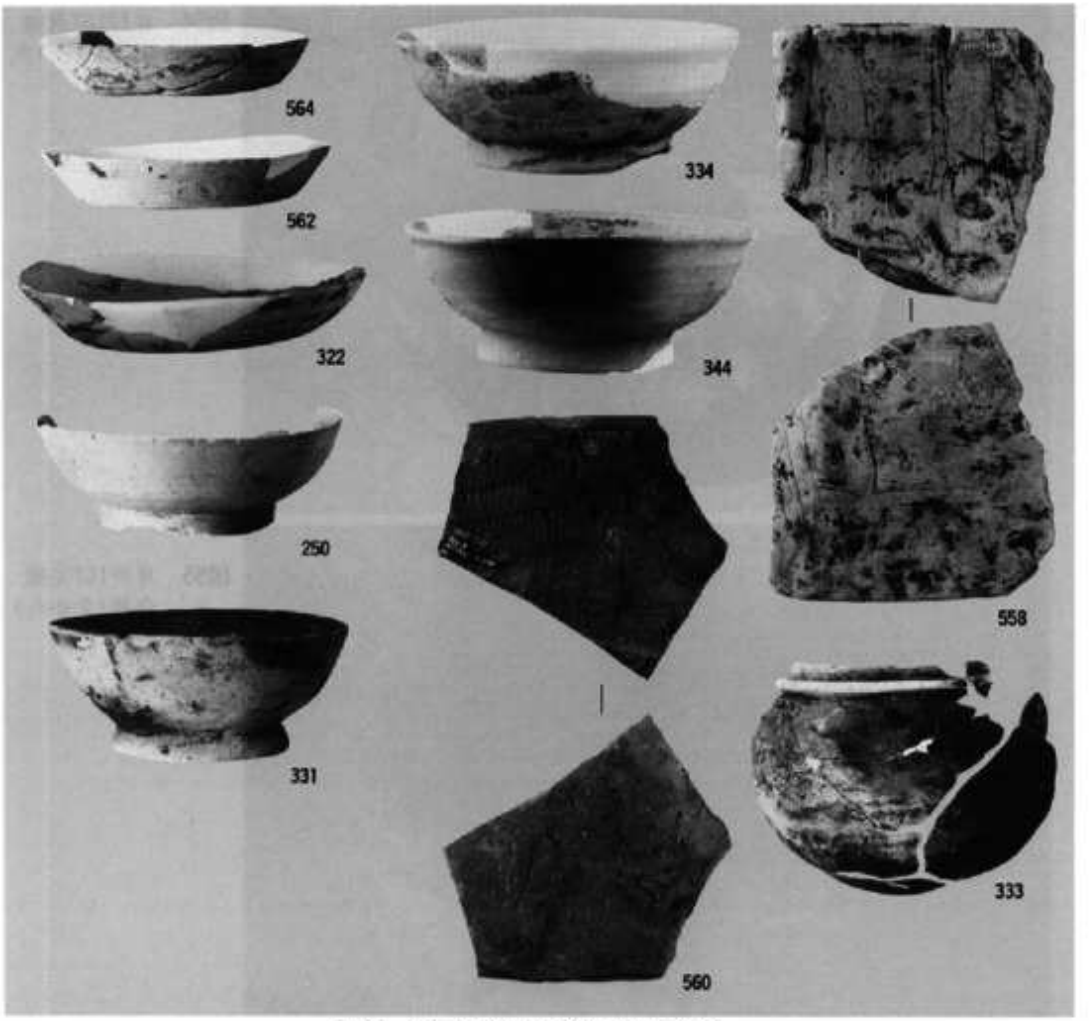


図53　井戸157出土遺物（縮尺不同）

土師器高台碗250は体部の1/3を欠く。やや軟質で，外面は淡黄色，内面は灰黄褐色を呈す。334は口縁部の大部分を欠く。堅緻であるが，器表の荒れが著しい。内外面とも淡黄色を呈す。344は，ほぼ完形の資料である。高台内の外底面に板圧痕が残る。331は完形の資料である。砂粒を顕著に含み，やや軟質である。内面の半ばが黒色のほかは，内外面とも浅黄橙色を呈す。

土師器釜333は底部を欠く1/4の破片である。外面は撫で調整，内面の上半部は撫で調整，下半部は篦削り調整がおこなわれる。体部中程には布目圧痕が残されている。やや軟質である。外面の鍔より下位に煤状の付着物が残る。器表は灰黄色を呈す。復原口縁径24.8cmを測る。

図54　井戸157遺物出土状況（南から）

図55　井戸157完掘全景（北から）

丸瓦325の上面には目の粗い叩き目痕が残る。また，粘土紐によるものかと思われる痕跡が斜めに走る。やや軟質で，器表面の荒れが著しい。器表は浅黄橙色を呈す。

平瓦560は上面では凸部に撫で調整を行ったのち，叩き調整を行う。下面にも，同様の叩き目痕が粗く残されている。側縁部は，上下面両側を大きく面取りする。558の下面には長軸方向の箆削り調整，さらに前縁部では縁部に沿った箆削り調整を行う。胎土に粗粒砂をごく稀に含む他は精良均質である。やや軟質で，灰白色を呈す。559は側縁部の一部を含む細片の資料である。上面では長軸方向の撫で調整をおこなう。下面には格子目叩き痕が残されている。胎土には粗粒砂を含み，須恵質で堅緻である。器表は灰色を呈す。

井戸197　(図56・63～65)

素掘りの井戸である。確認面での形状は歪な円形状を呈す。烏栖ロームと八女粘土の境界部で大きくえぐれる。えぐれ部及び底面は完掘することができなかった。

覆土は，暗灰色砂質シルトで，ロームブロック等の混入は顕著ではない。湧水点以下は藻状の有機物が多く含まれており，ガスが発生してその臭気が著しい。この部分から鍬，その他木製品，鉄鍋等の資料が出土している。

井戸197出土遺物　(図57～61)

木製品を除くと，総量でコンテナ1/5程の分量となる。弥生土器，土師器，須恵器を少量含んでいるが，湯釜，播鉢，土鍋の破片が顕著である。陶磁器は，16世紀までの各時代の資料が含まれる。

土師器　**548**は底部の破片である。底面は糸切り離しがおこなわれる。焼成は堅緻である。内外面とも灰黄色を呈す。底径7.3cmを測る。

染付　碗**551**は口縁部の小破片である。口縁部の外面に1圏線，内面には2圏線を施す。胎土は精良で白色，釉は半透明である。梢子光沢をもつ。氷裂が顕著である。施釉部は灰白色を呈す。復原口径12.5cmを測る。碗**550**は口縁部の小破片である。胎土は白色で，空

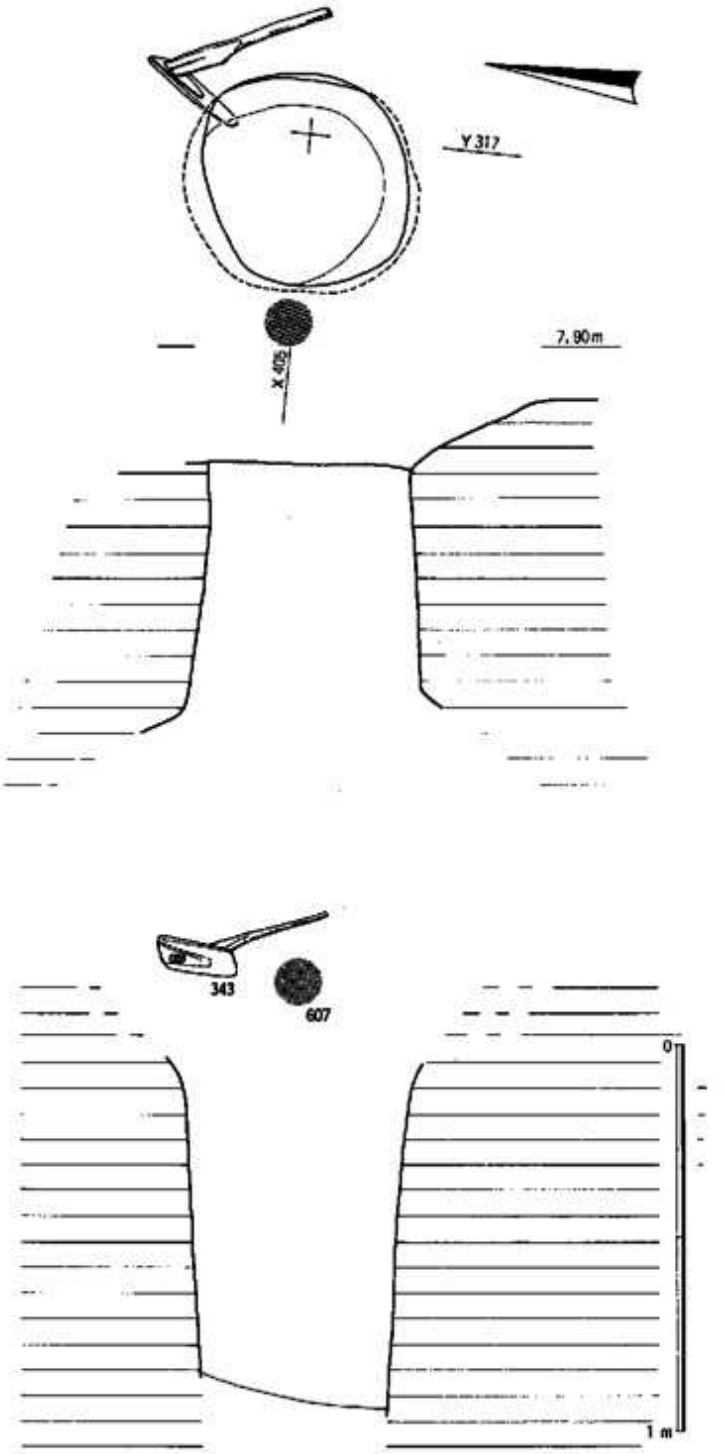


図56　井戸197実測図 (1/30)

隙，細孔が顕著である。釉は発泡し，半透明となる。口縁部内面には近接して２圏線を，外面では２圏線の間を波状の意匠で埋める。また，体部下半へも施文するが，意匠は不明である。復原口径9.4cmを測る。**皿549**は底部の1/2の資料である。やや軟質である。釉は発泡が著しく，白濁する。氷裂が顕著である。底部は碁笥底となる。見込み部を２圏線で画し，「福」字を書き込む。底径4.1cmを測る。胎土は空隙が顕著で灰黄褐色を呈す。底径4.1cmを測る。

擂鉢553は口縁部1/4の資料である。胎土には細孔があるが，堅緻である。内外面とも灰白色を呈す。復原口径は25.1cmを測る。

湯釜554は上半部の1/4の資料である。全体に撫で調整が行われるが，外面下半部には箆削り調整がおこなわれている。把手を欠損するが，その部分を挟んで一対の穿孔が行われて，把手に代えるための加工を行っている。肩部に管状の工具による刺突文が施されている。内面は灰

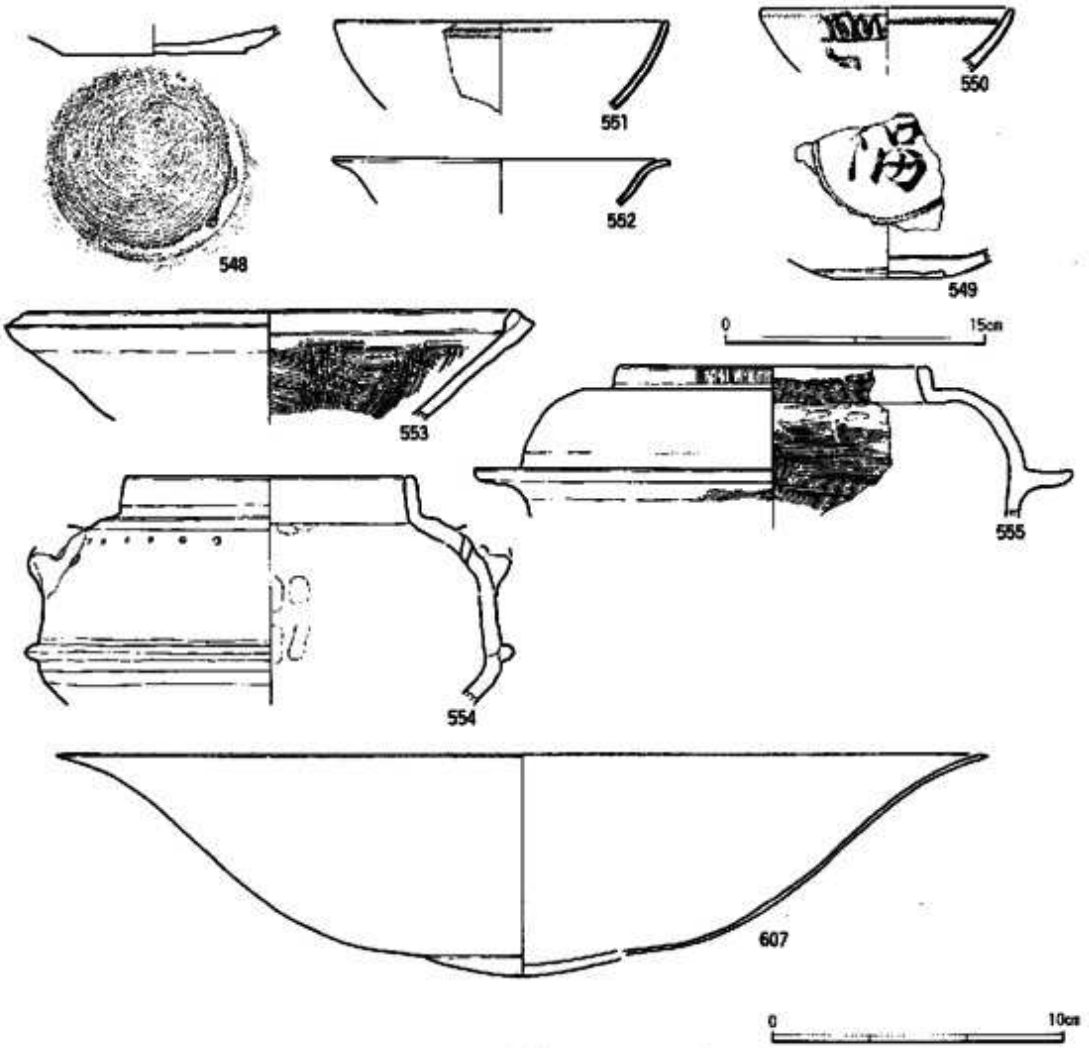


図57　井戸197出土遺物実測図１（1/3，1/4）

灰色である。555は口縁部の1/4の資料である。鍔部の上下面と口縁部に刷毛目調整痕を残すほかは，外面の全体に口縁と直行する方向の撫で調整を行う。鍔部の上面を除く外面の全体に煤状の付着物が残る。胎土には粗粒砂を含み，堅緻である。内外面とも黒色を呈すが，付着物によるものかもしれない。復原口径14.9cmを測る。

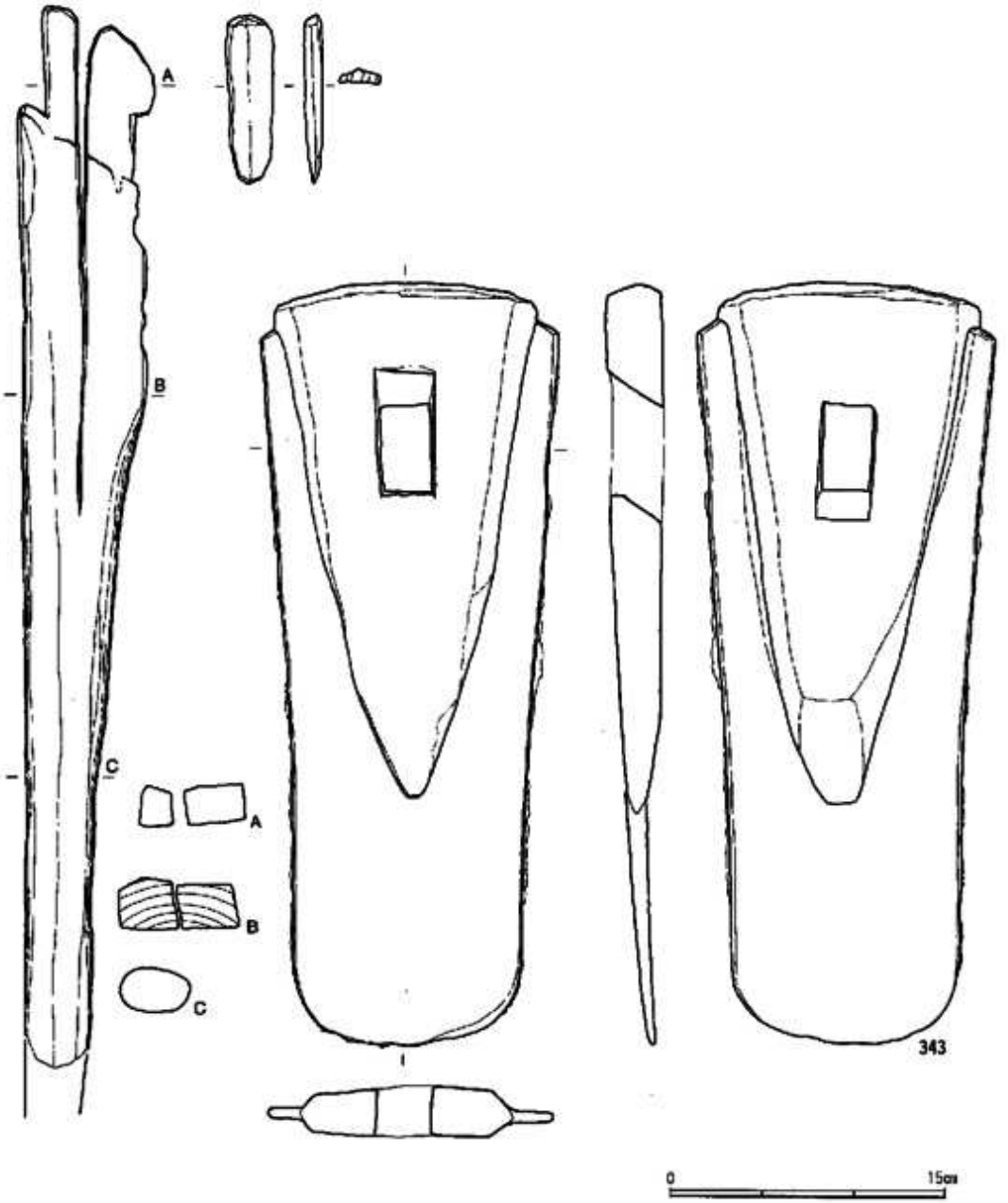


図58　井戸197出土遺物実測図２（1/4）

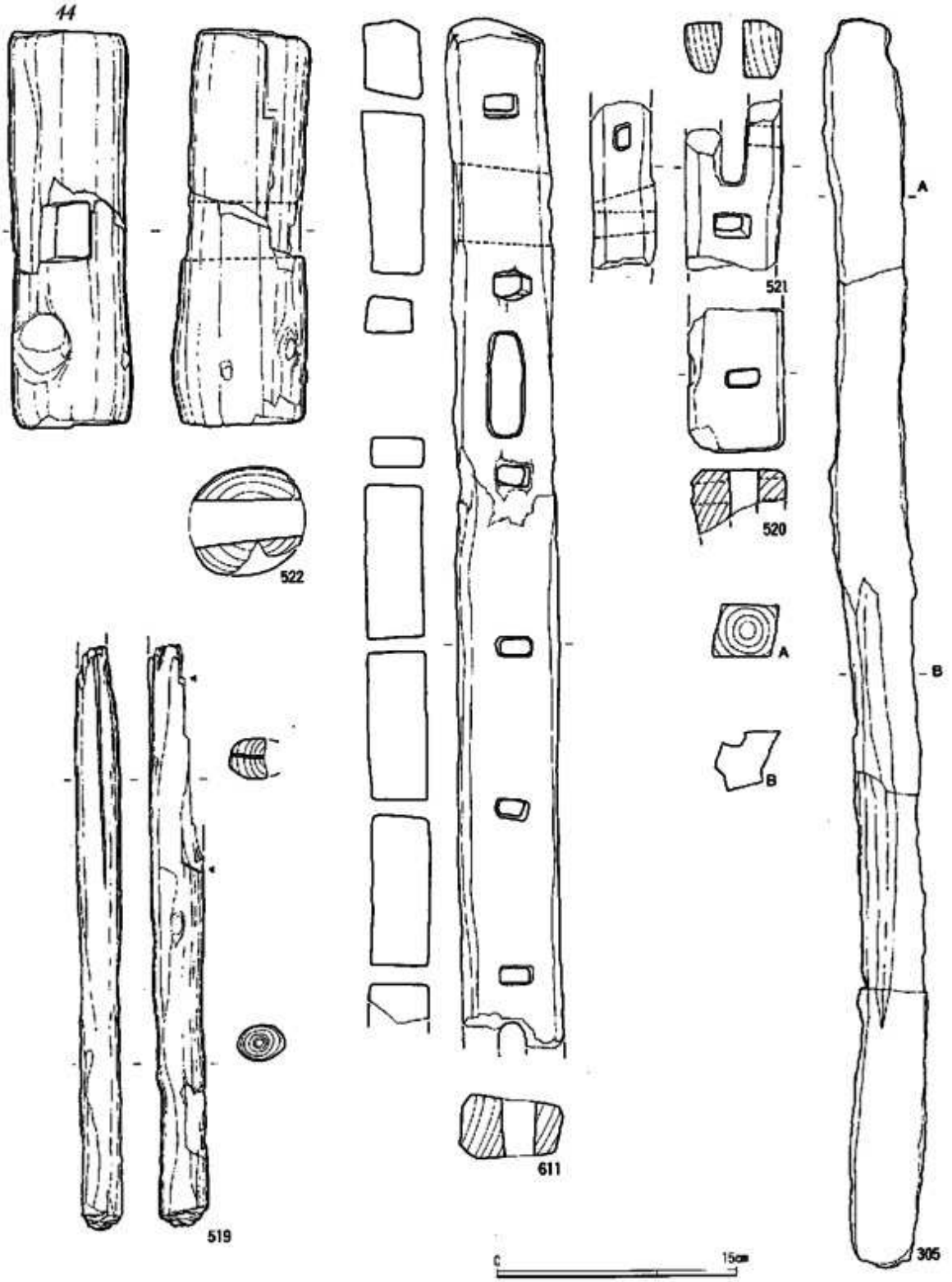


図59　井戸197出土遺物実測図３（1/4）

鉄鍋607は，底部が脱落している以外は，原形を留めた状態で出土した（図63）が，亀裂が生じており，破片で取り上げた。その後，各部に歪みを生じ，現状では，完全には接合復原はできない。復原実測の結果を図示する。また，底部はその位置は復原できるが，接合はしない。器壁は2～3㎜の厚さで，底部以外は，ほぼ全体に均一である。底部のみが2倍以上の厚さを

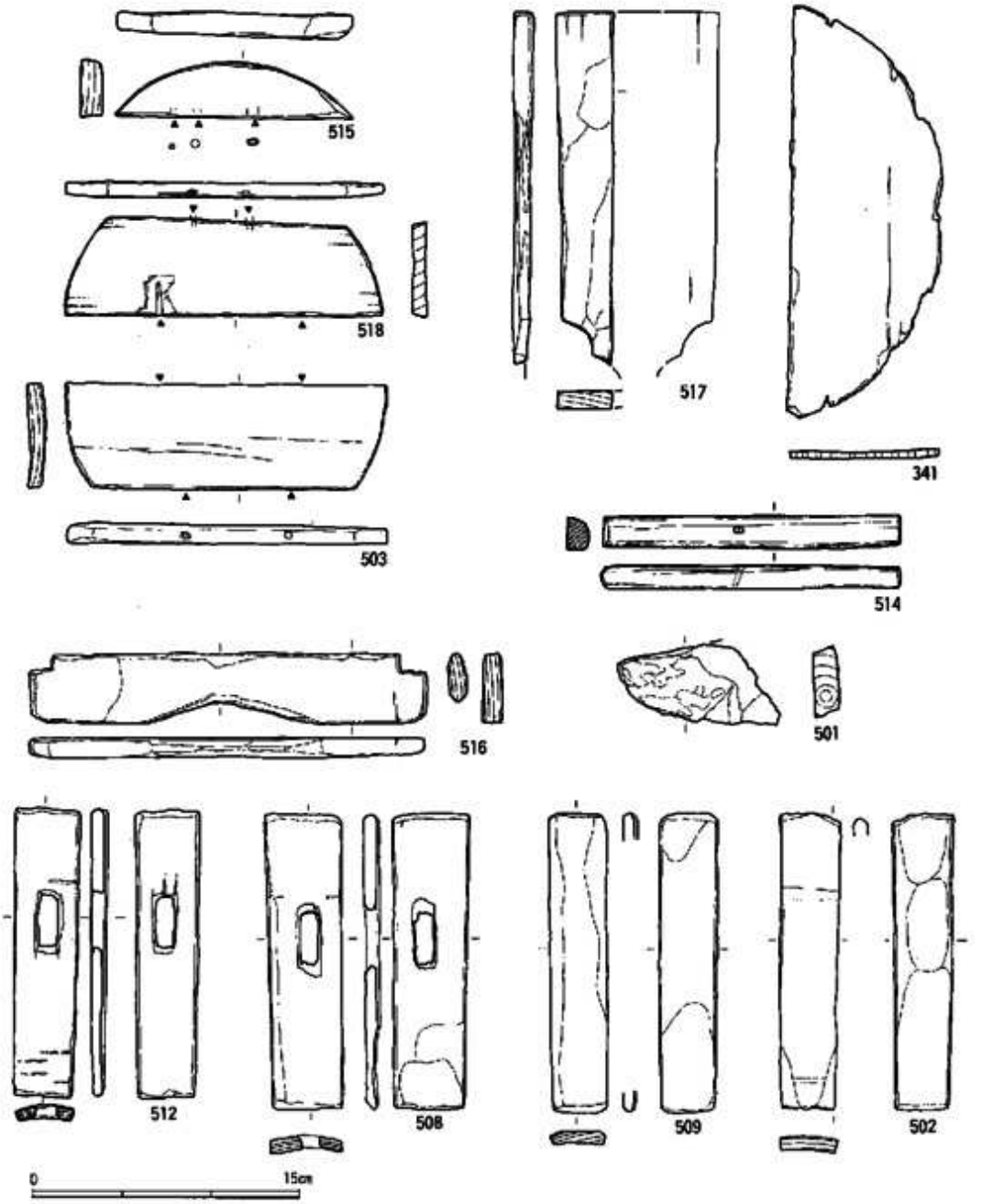


図60　井戸197出土遺物実測図4（1/4）

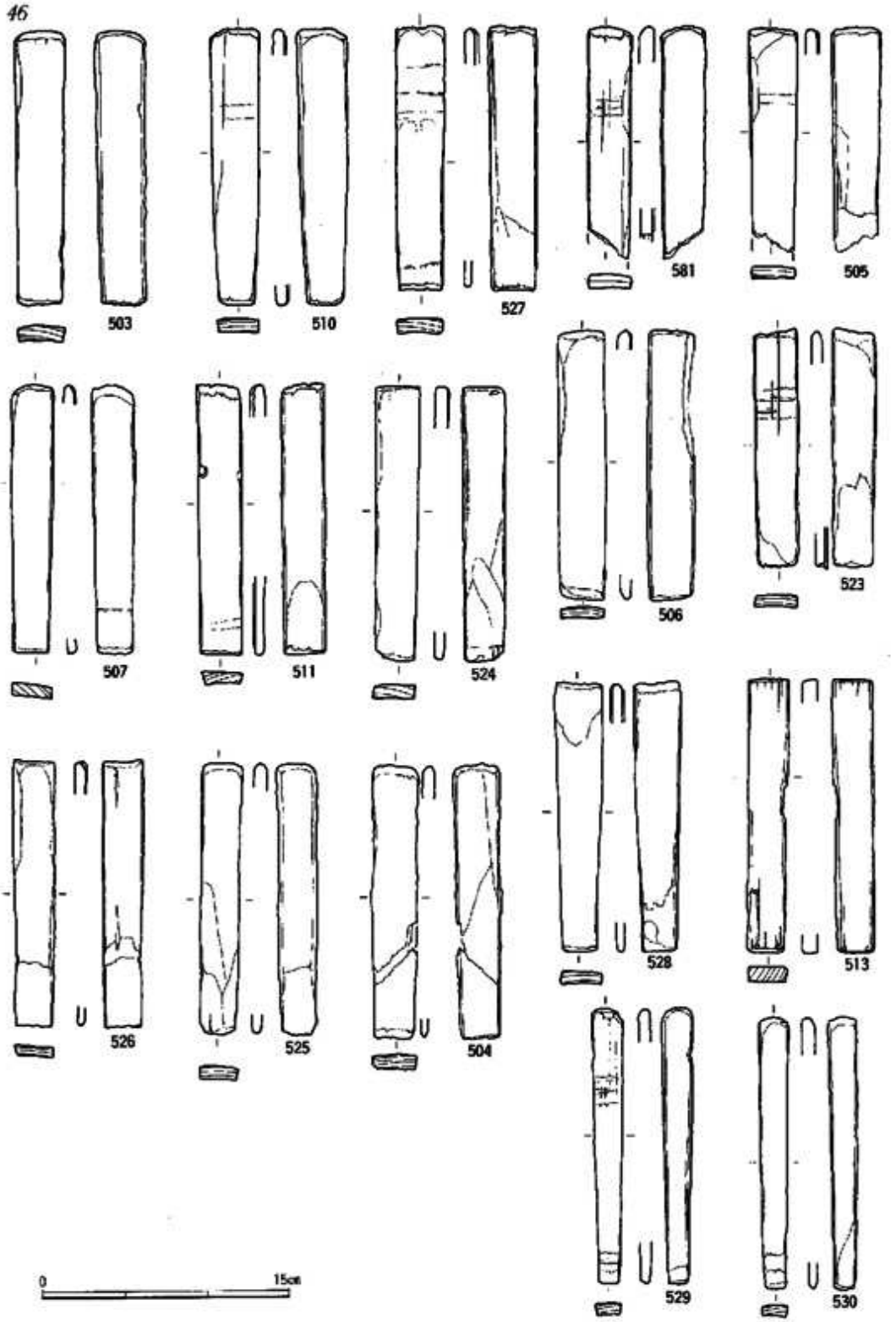


図61　井戸197出土遺物実測図5（1/4）

もつ。底部に板状の突起が残されている。復原口径47.0cm，同器高11.3cmを測る。

鍬343は，柄の端部を欠く資料である。図62に示すように，装着された状態で出土したが，保管上の問題があったので，部品毎に分離した。図は各部品の状態で示す。鍬身のほぞ穴へ柄を挿入し，柄に入れた割れ目に楔を打ち込んで固定する装着方法をとっている。鍬身の刃部は鉄製で，刃先は丸みを帯びている。柄は板目材を使用して，手元に近い部分には丸みを付けている。鍬身の長さ42.0cm，刃部の幅12.5cmを測る。柄の長さは53cm以上である。柄と身との取り付け角度は，柄に残る圧痕から推定すると，55°を前後したものとできる。

木製品522は木槌の部材である。長さ25.0cm，径8.0cmを前後する。

資料519は何らかの部材であるのか，単なる切断された木材なのか判然としない。図上の下端が断ち切られ，上端の２箇所に切り込みが入っている。また，上部から縦に割れ目が入っている。上端部は欠失しているようにもみえる。現状で長さ32.6cm，太さ３cmを前後する。

木製品611は，同521・520と接合し，原状を復原できる。角材に等間隔に断面長方形の穴を穿ち，それと直行する２方向により大きな長方形のほぞ穴を穿っている。断定はできないが，馬鍬の部材と解釈できる資料であろう。復原すると長さ85cm，幅6.5cm，厚さ3.5cmの大きさとなる。

木製品305は腐食が著しい。断面が四角形の角材である。特別の用途を考えることのできる加工，使用の痕跡は観察されない。長さ79.0cm，一辺が4.5cmの大きさである。

木製品515・518・303は同一個体の部材で，図の位置関係で木釘により接合されていたものであろう。復原すると径18.2cm，厚さ1.0cmの蓋または桶底板となる。

木製品517は，側縁に位置する部分の資料である。中央部に当たる部分が欠けているとして，原状を復原してみると，羽子板状の製品となる。器表には削り痕が残るのみで，装飾等の痕跡はない。現状で長さ19.8cm，幅3.2cm，厚さ1.0cmを測る

木製品341は腐食が著しいが，片面に漆が部分的に残っている。側板との接合用の孔かと思われるものの痕跡があるので，曲物底板とするべきかもしれない。

木製品514は断面が半円状をなし，木釘によって平坦面で他に接合していたことが考えられる。把手とするべきであろうか。長さ15.9cm，幅1.8cm，高さ1.3cmを測る。

木製品501は元の形状を復原できない。漆が部分的に残っている。

図60の516・512・508・509・502と図61の全ての資料は，同一の桶を構成する部材であろう。512と508が対になって把手516と組合わさる。他もすべて側板である。側板とする資料は長さに対してその幅の変異が大きいが，特に529・530は細身である。あるいは，仕上がり径の調整をするための部材かも知れない。側板とする部材は，多く板目材を用い，横断面で年輪の中心方向へ緩い弧を描く様な湾曲をもつ。底板との密着性を高めるための工夫であろうか。

図62 井戸197遺物（343）出土状態（西から）

図63 井戸197遺物（607）出土状態（東から）

図64 井戸197全景（東から）

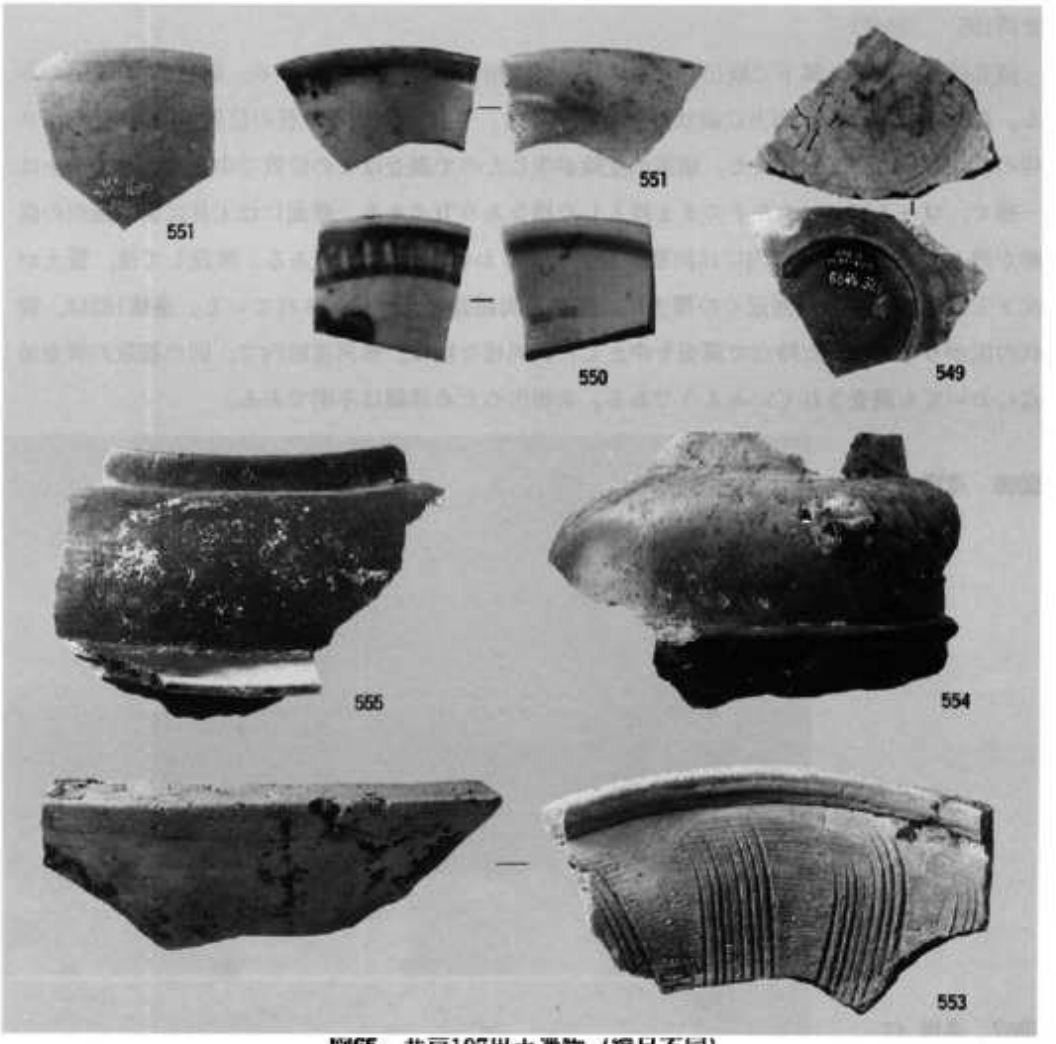


図65　井戸197出土遺物（縮尺不同）

近世の遺構について

先に述べたように今回調査では，検出した遺構に占める近世あるいはそれ以降の遺構の割合が大きかった。細かく個別の検討を加えた訳ではないが，幾つかの遺構の概要を記しておきたい。

遺構47　（図67）

調査区中央部で検出した。小穴の底面からやや浮いた位置に，２枚の土師質の皿の口縁を合わせて納めている。民俗例で出産に伴うとされる行為の結果であろうか。覆土はごく柔らかい。土器内部に遺存する資料はなかった。皿は，轆轤により成形したのち，外面に篦削り調整が行われている。皿は同形同大で，その口径11.6cm，器高1.6cmを測る。

遺構198　(図66)

調査区西半段落ち部下で検出した。確認面では楕円形状で，長さ1.7m，幅1.2mの規模である。掘り下げてみると四方に袋状に大きく広がり，確認面から2m程の位置では，幅が3.5m程の広がりをもつようになる。崩落の危険が生じたので調査はこの位置で中止したが，覆土は一様で，ロームブロックをそのまま投入した様なあり方である。壁面には工具による掘削の痕跡が残っている。調査区内には同種の遺構とおもわれる遺構182がある。埋没して後，覆土が沈下したものか，検出面近くの覆土には肥前系陶磁器，瓦が投入されている。遺構182は，袋状の広がりを確認した時点で調査を中止した。同様な構は，那珂遺跡内で，別の複数の調査地点においても調査されているようである。未報告のため詳細は不明である。

図66　遺構198
(北から)

図67　遺構 47
(北から)

Ⅳ　おわりに

那珂19遺跡出土の瓦について

今回の調査では，布目の圧痕をもつ瓦が出土している。いずれも，後世の遺構の覆土に混り込んだ状態での出土である。その多くは，土師質ともいえるような酸化炎焼成，軟質の資料である。また，形態としては平瓦の細片が殆どを占めている。それ以外は，本文に示したように，調整・焼成の変化が多種多様にみられる。今回調査資料からだけでは，類型化のためには，数量が余りに少ないが，いくつかの特徴をもった資料を挙げることができる。平瓦は，模骨圧痕，布目圧痕をのこす資料が多いがさらに，撫で調整や篦削り調整を加える資料がある。下面の調整は多様であり，撫で調整のほかに，平行，格子目の叩き調整を加える資料もある。全体の形状を復原できる資料は，溝４出土の595のみで，これから１群を類型化できよう。他は，これを小形として，より大形の資料となる。

丸瓦は，図示したものの他は資料数が少ない。下面に模骨圧痕，布目圧痕を残す資料が殆どであるが，その全体を撫で調整により仕上げた資料もある。上面は，撫で調整の資料が多く，これに疎らな叩き目調整を加えたものもある。格子目叩き調整の行われる資料はない。全体を復原できる資料はないが，恐らく行基葺の丸瓦と考えられる資料が多い。玉縁をもつと資料は，溝４から細片が出土しているのみである。資料が２点あるなかの１点は，燻しを行う点，いまみる瓦資料の何れとも異なる。

軒瓦は瓦当面のごく一部を残す丸瓦の資料のみで，外区が帯状に突出することが分かるほかは，内区の状況は不明確な資料である。

さて，以上のような内容の資料に関連すると思われる瓦の資料が，那珂遺跡の他の地点での調査で出土，報告されている。那珂７次調査では，井戸から，多量の遺物に混り，２点の平瓦細片が出土している。那珂８次調査では，溝および井戸から丸瓦，平瓦が少量出土している。那珂13次調査では，井戸および，竪穴住居とした遺構から多量の遺物に混り，少量の丸瓦，瓦当が出土している。那珂14次調査では，井戸から平瓦が出土している。那珂21次調査では，井戸から多量の遺物とともに出土した。那珂22次調査では，より遡る時期の資料が，多量の遺物とともに，不整な土壙から出土した。那珂23次調査では，溝から，多量の遺物とともに多数の瓦資料が出土している。以上報告された資料の他に，今回報告地点に東接する那珂32次調査で，やはり多数の資料が出土している（注２）。

これらの地点のうち，多数の資料を出土した調査では，酸化炎焼成の瓦が顕著であることは，本次調査地点と共通する。各地点での資料数という問題があろうが，規模，調整といった点で全く一致する資料は多くないが，14次地点，23次地点との間に同類の資料とみえる資料をもつ。また，そのような資料でも，還元炎焼成と酸化炎焼成によるという相違が生じている。

瓦の年代については，本調査地点の資料からは，明言できない。那珂23次調査の結果を借りるならば，7世紀後半から末を与えることとなるが，上述したようにより新しい年代を考えなければならない資料も含む。

那珂遺跡の上記各地点間の位置関係をみると，本調査地点が8次地点と23次地点との中間に位置していることがわかる。8次地点と23次地点間の距離は500mで，両地点の瓦を出土した溝はほぼその方位が一致し，軸線が互いのそれの延長線に一致するようにみえる。さらにこの線は，本調査地点の溝4のやや東を通ることになる。但し，溝4は調査区内の走向が，上記軸線よりも西に偏している。7次地点は本調査地点から東400m，14次地点は北西300m，21次地点は同500mの位置にある。

以上のことからすると，那珂遺跡とする区域のごく広い範囲に瓦の分布を考えることができる。このうち，最も多量の瓦の出土したのは23次地点で他地点よりもその量が抜きんでている，19次地点がこれに次いでいる。これらの資料に対して，それと使用していたと見做せる建築物はこれまでの成果のなかでは確認されていない。いま，瓦の出土量からのみ考えるならば，23次地点がそれに最も近い位置にある可能性を言うことができるものであろうか。ここで，後世の造作という条件は考慮にいれずに，23次地点を旧地形を比較的表現している地形図にあてはめてみると，東西方向の尾根上で緩い起伏のうえに立地していることがわかり（図1），大規模な建物を考えるとするならば，さらに東北，あるいは南西方向にやや離れた，比較的ひろい緩斜面が可能性としてのこされる。

注1　福岡市教育委員会　1987　『那珂遺跡－那珂遺跡群第8次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集

注2　福岡市教育委員会　1987　『公民館建設関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集

福岡市教育委員会　1987　『那珂遺跡－那珂遺跡群第8次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集

福岡市教育委員会　1990　『那珂　2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集

福岡市教育委員会　1992　『那珂遺跡　4－那珂遺跡群第23次調査の報告　その2－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集

福岡市教育委員会　1992　『那珂　5－第10・12・14・16・17・21次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集

那　珂　7

福岡市埋蔵文化財調査報告書第323集

1993年3月31日

発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷：福岡印刷株式会社

福岡市中央区天神3丁目4番3号